

We

くらしと教育を
つなぐWe

1998



女と男の家庭科新時代



複眼で見る

ほんとうの自分を求めて

道下匡子

ベル・フックスと日本の女たち

堀田 碧

私はフェミニスト失格？

吉原 令子

特集
多様な
フェミニズム

夏のスタディ・ツアー

フィリピン

子どもたちと女性

① 6月26日発 ② 9月25日発(3泊4日) **138,000円**

ストリートチルドレンの保護組織で現状説明、昼食と交流会、現場視察、日比混血児の母支援組織で現状説明と交流会、スラム視察を通じて、弱者を国際的にどう支えていこうか考えます。

タイ

女性と子どもたち

① 7月16日発 ② 9月3日発(4泊5日) **148,000円**

バンコクで、農村女性の自立援助 NGO と児童売春防止国際 NGO のエクパットを訪問し、現状説明を受け、日本人ボランティアと懇談し、今何をすべきかを考えます。

オーストラリア

高齢者介護視察

7月26日～8月2日(5泊8日) **398,000円**

シドニーとポートスチーブンスで、現状の概要講義、リタイアメント村、ホステル、ナーシングホーム、デイケアなどを視察し、中負担の福祉を実感します。

スウェーデン
デンマーク

教育・福祉視察

8月17日～8月26日(8泊10日) **548,000円**

スウェーデンで元社会庁長官の講義、保育園、グループホーム、ナーシングホーム、小学校と高等学校、デンマークで保育園、統合教育の小学校、児童相談所、障害者作業所を視察する予定です。

スウェーデン
デンマーク

高齢者介護視察

8月29日～9月7日(8泊10日) **498,000円**

スウェーデンで元社会庁長官の講義、痴呆性老人グループホーム、サービスハウス、ナーシングホーム、老人ホーム、デンマークで老人ホーム、高齢者センター、介護器具センター、在宅ケアを視察して、北欧の福祉の質を体験します。

スウェーデン

国政選挙と福祉視察

9月18日～26日(7泊9日) **478,000円**

9月19日投票前日に町で有権者と政策論争する政党首脳の姿、候補者に質疑応答、選挙見学、政党訪問、グループホーム、ナーシングホーム、男女平等連合などの視察を通じて、国民に真実を説明する政治家の姿勢、本物の民主主義の姿、福祉政策の重要度、90%に近い投票率の理由、真剣に判断する有権者などから、日本人はどう改革したらいいかを考えます。

問合せ先・受託販売:(株)ホライゾン

TEL **03-3770-0149**

FAX **03-3770-0728** 東京都知事登録旅行業第3515号

東京都渋谷区桜丘町15-4 ルート桜丘ビル2階

旅行主催

(株)道祖神

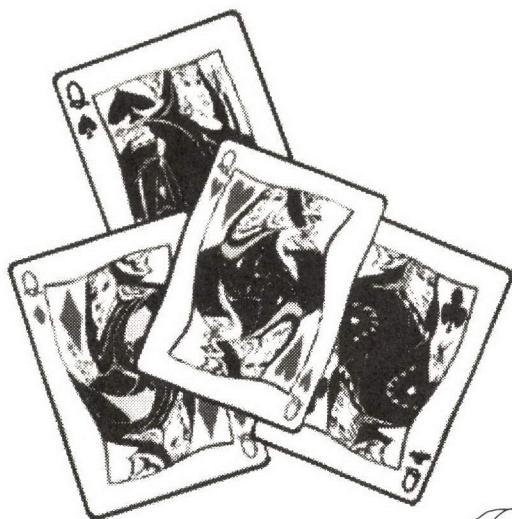
運輸大臣登録一般旅行業第757号

くらしと教育をつなぐ

We

1998
6月号

特集
多様なフェミニズム



Tu

連 載

- おんなが歳をとるということ 木村 栄 ……………42
- 染と織の歳時記(3) 吉村 美加 ……………43
——染料まかせの草木染め
- シネマの魔 27 武田 秀夫 ……………44
「デカログ 第1話 ある運命に関する物語」について
- いきいきごんぼ 桑田 良彦 ……………48
- 変な子じゃないよね 滝野澤直子 ……………50
- 蔦森樹の巡業日記 蔦森 樹 ……………52
- 本をめぐる 近藤なをみ ……………53
超！気まぐれなりれーえっせい(3)
——はるき悦巳『ジャリン子チエ』(双葉社)
- 自己表現トレーニング(3) 河村 ふみ ……………54
——わがままのススメ
- 居場所考 37 水田 宗子 ……………58
——不透明な視界の前方に

- ◇ 今月の一冊 稲邑 恭子 ……………25
- ◇ 読者のひろば ……………61
- ◇ We 夏季フォーラム' 98 in 岡山 「おいでんせえ 岡山へ」 ……………63
- ◇ 編集後記 …………… 64

特集 多様なフェミニズム

<インタビュー・複眼で見る>

道下匡子さん

ほんとうの自分を求めて

<聞き手 稲邑恭子> ……4

- ★ベル・フックスと日本の女たち 堀田 碧 ……12
- ★私はフェミニスト失格? 吉原 令子 ……19
- ★「女性国会」から半年 吉田 圭子 ……26

女と男の家庭科新時代

- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎 ……29
- 家庭科 ラフスケッチ 山内 聡子 ……30
- 家庭科 風がかわる匂いがかわる
保育——自分を好きになることから始める 香川 恭子 ……34
- 楽市楽座 加藤 昭仁 ……40
——連想ゲーム

複眼で
見る見

ほんとうの自分を求めて

●インタビュ―

道下匡子さん



photo : Gloria Steinem (グロリア・スタインエムの家で)

道下匡子さんは、『ミス』を創刊した優れたジャーナリストであり米国の女性解放運動のリーダーであるグロリア・スタインエムに魅せられ、九二年に全米でベストセラーになった彼女の著作『ほんとうの自分を求めて』（中央公論社）を時を置かず翻訳し世に出した。「自尊心こそ変革を実現するための最も基本的な力」とするグロリアの明晰だが温かく肯定的なメッセージは、いまの日本の混迷を解決する確かなヒントを与えてくれるように思う。

（聞き手 稲邑恭子）

プロフィール
みちた・きょうこ 作家・翻訳家。一九四三年樺太で生まれる。六七年、ウイスコンシン大学ジャーナリズム科を卒業し、ニューヨーク国連本部に勤務。七〇年から東京アメリカン・センターのアート・プログラム・スベシヤリストとして、現代アメリカの文化を日本に紹介してきた。著書に「アスピターニヤ、わが樺太」（河出書房新社）訳書に「ジョージア・オキーフ伝」（ハルコ出版）など。

フェミニズムは階層主義をなくすための運動

稲邑 私はこういう仕事をしながら、フェミニストの大きな集会を敬遠していました。予め「正しい答え」があつてそれを学び、それに近づかなければならないというような、私が体験し途中で脱落した六〇年代末の学生運動とある意味で非常に共通する、ある種の圧迫感のようなものを感じて居心地が悪いからなのだと思います。私自身、その体験がきっかけでカウンセリングの学習に引き寄せられていましたし、日本のフェミニズムがもっと多くの女性にとつて自分自身をエンパワーするものになるためには、外の改革と同時に自分の内面を見つめ、自分を大事にするということが必要だと感じています。だからその意味で、アメリカのフェミニズムの輝かしい旗手であるグロリア・スタイナーが、自尊心や内面の改革のことをテーマに、八七年から九二年にかけてこの本を書き、全米で熱い反響をよびおこしたということが、これは日本だけの問題ではなかったのだと嬉しかったのです。

道下 多分、あなたのいまおっしゃっていることは、ヒエラルキー（階層主義）の問題だと思ふのよ。フェミニズム

がめざす究極的なゴールは、性別や宗教や人種の違い、障害の有無を超えて、すべての人の平等が実現される社会です。グロリアがこの本のなかで何度も指摘しているように、一握りの人間が大多数の人間を支配する階層主義こそ、さまざまな暴力の源泉なのです。男社会とは、つまり階層主義社会であり、それは真の民主社会のありかたとは根本的に矛盾します。

フェミニズムはこの階層主義を私たちの社会からなくすための唯一の運動です。ですから、もしもフェミニズムの名のもとに階層主義が存在するとしたら、それはもう最初から間違ひなのです。

自尊心を育てる

道下 この本が出たのが九四年春、大河内清輝君がはじめがもとで自殺したのが同じ年の十二月ですが、その少し前に、私は自尊心の欠如といじめの問題の関わりを追求した記事のある新聞に書いたことがあります。

しかし、ここでとても重要なことは、プライドと自尊心の違いです。「水増しの自分」を基にしたプライドに比べ、自尊心のほうは「あるがままの自分」を土台にしています。

あるがままの自分とは、自分のいいところも悪いところもすべて含めたほんとうの自分のこと。

プライドのほうは、自分の欠点を押し隠し、実際の自分よりよく見せたいと風船のように膨らませた自分を基にしています。もともと偽の膨らんだ自分だから、ちよつとのことでは傷つくのね。でも自尊心であれば、本当の自分だから、他人にほめられようが、くさされようが、自分の核心が揺らぐことはない。でも、この「核心的自尊心」は、小さいときに無償の愛がふんだんに注がれてはじめて育つのです。親でなくてもいいのですが、とにかく誰かが、助けを求めるときにはいつでも来てくれ、無条件の愛を注いでくれるということ。

残念ながら、誰もがこんな愛を経験できるわけではない。しかし、幸いなことに、自分は不幸にしてそういう生い立ちをしなかったと気づいたなら、その時点で自分が自分を癒す方法があると、グロリアは強調しています。いつになっても遅すぎはしない、自分が過去に戻り、それを確かめ、癒すことができるということです。その意味で、とても希望に満ちた本です。

稲邑 終わりのほうで多重人格について書かれたくんだりがありますね。性的虐待等が原因で多重人格の症状を呈し

た人が、ぎりぎり生き延びる過程で獲得したさまざまな能力を、むしろ自分たちも意識的に積極的に獲得していけないものかという内容で、大胆な主張なのだけど、魅力に満ちたメッセージでした。

道下 最後の章は一年後に付け加えられたものなのですが、読者の生き生きとした鋭い反応がグロリアを感動させたんですね。ほとんど二年がかりでようやくこの本を訳し終えたと思ったら、「これはやはりぜひ加えましょう」と編集者。そのときはまだ、私はアメリカンセンターで働いていましたから、翻訳に使えるのは週末と祝日と有給休暇だけ。さらに四〇頁訳すというのはショックでした。でも、グロリアの本は私にとって宗教みたいなものですから。ところで、愛とロマンスの章、よかったですか？

稲邑 ええ。ああいう説明は初めてで、目から鱗でした。**道下** 未だに多くの人は、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』が最大の愛だ、ロマンスだと言っているでしょ。でもあれは愛じゃない、ロマンスにすぎないのです。『嵐が丘』とシャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』を対比させたグロリアの分析は明晰でしょう。愛は相手にとって最良を望み、ロマンスは相手を所有することを望むのです

ジョージア・オキーフとグロリア・スタイナムは私にと

って、混沌とした世界に秩序を与え希望で満たしてくる存在です。グロリアはマリリン・モンローのことも書いていますが〔「マリリン」グロリア・スタインム著／ジョージ・パリス写真／草思社〕彼女のことをあのようによく感をもつて分析したのは、グロリアが世界で初めてでしょう。

日本の男たちはいまだにフェミニストが嫌なようね。でもアメリカに行くくと、よい仕事をして素敵でわくわくした人たちはほとんどみなフェミニストなの。

私もフェミニストだというだけで表現の場を狭められるということがあった。でも私は長年給料生活者でもありませんでしたから、自分の信ずることだけ述べて一応食べていくことができた。それはありがたいことでした。そのため九時から六時までの仕事を手放せなかったともいえます。衣食住足りてはじめて個は自由になれるでしょう。

男に媚びるといふ問題もね、「私にとつて大切な男は私に尊敬のできる男だけ」ということになれば、もつと女は毅然と振舞うことができるでしょう。女が男に——それも全ての男に——媚びを売るのはその認識が曖昧だから。自分が選んでセックスをする男というのは一生のうち何人もいないでしょ。ところが日本の男たちの大半はあらゆる女を性的対象と見なしているために、自分に媚びないのは全

部怖い女ということになる。日本の大人の男と女たちに優美でセクシーな人が稀なのはここに原因があると思えます。

自己を明確にすることが大切です。自己がきちんとあつて初めて自分の生活が存在し、そこからはじめて自分と他者との関係が始まる。日本社会は〈偉い人〉を特別に扱うことを強いる社会。でも〈偉い人〉っていったいどんな人のことをいうのでしょうか。アメリカ人はよくこう言うのよ、「別に私の家賃を払ってくれるわけじゃないのに、何で奴が偉いんだ」って（笑）。自分を卑下して媚びなければならぬ人など、実際のところ誰もいないのだ、つてわけ。

平等とは差異をつくらないことではない

道下 でも、平等は基本的に機会平等のことであり、あくまで入り口での平等です。能力や成果に差があるのは当たり前。文化や芸術はそのようにして生まれるわけで、誰がデザインしても同じであれば、いい建物も生まれません。人間の能力や成果の違いを認めずに失敗した有名な例に、旧ソ連のコルホーズと呼ばれる農業政策があります。

ディスクリミネーション（差別／識別）という言葉は、

普通、人間に対する差別という意味で使われていますが、芸術の世界、美の世界においては、この差別（識別）能力がきわめて重要です。人々の味覚をはじめあらゆる感覚の鋭さ、繊細さにはつきりと順位をつけることができる。つまりここでは、ヒエラルキーが厳然と存在するのです。繊細になればなるほどその目盛りが細かくなり、細かくなればなるほど、その人の日常生活は楽しく充実したものになる。自分の琴線により深く的確に触れるものを求めることが可能になるからです。絵画、音楽、人と人とのつきあいにおいても、この能力を開発することが、個を自覚めさせ発展させ得るのです。

文化や芸術の創造こそ、動物と人間を分ける最も大きな違い。この自己を徹底的に磨くというプロセスが日本の教育では欠けています。管理教育の元凶である文部省などいっそのこと廃止したほうがいいのでは、とさえ私には思われます。教育委員会が校長を管理し、校長が現場の教師をコントロールするといういまの仕組みがつづく限り、けっしてよい教育などできない。この日本の教育制度におけるヒエラルキーを壊さなければ、民主教育は無理です。しかし、日本人の多くはほんとうのところ、ヒエラルキーが大好きでしょう。国際社会から馬鹿にされる理由の一つは、

まさにそのことです。

村上春樹の『アンダーグラウンド』（講談社）が感動的なのは、被害者の方々があの事件を通して、日本という巨大な管理社会が内包する暴力の正体に迫ろうとしているからです。あのときに、例えば、地下鉄現場の職員は乗客の生命を守るために身を粉にして動いた。しかし最も責任ある立場にいる人たちは、かつて樺太や満州で起きたことと同じことをしました。あのとき乗客を守るために迅速かつ適切な決断をしていたら、サリンを乗せた丸の内線が一時間以上も往ったり来たりしていないわけよね。

村上春樹は「ねじまき鳥クロニクル」（新潮社）を書くにあたってノモンハン事件をリサーチしたときに、日本の軍部に対して感じた怒りと同じ怒りを、この「地下鉄サリン事件」でも感じたから書いたのだと思います。この作品で村上春樹は、ついに世界的作家の仲間入りを果たしたと私は信じます。

ジャーナリズムは基本的に、正義が踏みにじられ悔しい思いをしている社会的弱者の代弁者であり、政府の行動を監視する番犬でもあるとアメリカの大学で習いました。日本は江戸瓦版が始まりなので、目新しいニュースを追うのが主な役割になっています。軍国主義の時代の大本営発表

を反省すると言いながら、戦後も本質的には同じことをや
っているでしょ。

日本の記者たちは自分たちのことを権威だと思っている
からだめなのです。あらゆる権威をクソ食らえと思うこと
から始まらなければ……。芸術家、物書き、ジャーナリス
トたちは、弱い人、正義を踏みにじられている人の味方で
なければなりません。もしそうでなければ、そんな面倒な
ことなどせずに、月でも眺めながらお酒でも飲んでいたほ
うがよほど面白い。

自分自身が関わらなければだめなのです。それが民主社
会の始まりですから。そうすると、多くの場合痛い目に遭
うと思うの。でもその痛さの何十倍もの得るものがある。
もしそれを恐れてこれまでの自分を少しも変えようとしな
いなら、傷つきもしないかわりに大きな喜びもない。でも
現実に権威を否定するのはとても勇氣のいることです。な
ぜなら、富や権力を求めて右往左往している人たちに仲間
外れにされて、もしかしたら、明日から食べられなくなる
という危険がありますから。でも、まわりに迎合せず、た
だひたすら自分の信すること、真にやりたい仕事に向かっ
て突き進むことは、人間を最も繊細にさせるわ。だって感
覚を全開にして生きていかなければならない。女も男も真

の意味でセクシーになるためには、あらゆる権威を否定し、
日々しつかりと自分と向き合って生きていくことだと思っ
の。

オキーフとグロリア

稲邑 道下さんは樺太生れでいらつしやいますね。

道下 そう、三歳半のときに本土へ戻っていますが、樺太
での体験は私の人生の出発点です。私がどんな権威も信じ
ないのは、そこから来ていると思うの。だって、いち早く
情報を手にした軍や憲兵や行政の責任者の大半は逃げてし
まい、無防備な市民だけが残されたところへ、ソ連軍が侵
入してきた。真岡は戦場になり、一瞬のうちに文字通り地
獄絵と化す。私たちが生きて帰って来られたのは、当時日
本の国民が信じ込まされていた「生きて虜囚の辱めを受け
ず」の教えを父が無視して、家族を守るためにロシア兵の
前にいち早く投降したからなのです。

そのへんのことは『ダスピターニヤ（さよなら）わが樺
太』（河出書房新社）で詳しく述べているのですが、権威を
尊重する、しないは、自分が生きるか死ぬかというときに
誰が助けてくれるか、何が自分にとって最も頼りになるか

ということをきちんと考えたかどうかということと密接な関わりがあると思うのです。生命が危険にさらされる緊急事態に直面した場合、必要なのは組織（家族）の長の迅速かつ適切なリーダーシップです。極論すれば、緊急の場合以外にヒエラルキーはいらない。ヒエラルキーが必要なのは、外科医、消防署、軍隊だけであるとグロリアは言っています。何か日本で事件が起こると、強い父親を望む声が必ず出て来ますが、それは全く間違った考え。ヒエラルキーが必要なのは緊急の場合だけです。同様に政治や行政の役割も、私たちの一人ひとりが安全に暮らせるよう、その助けをしてくれるものなのです。

グロリア・スタインムは、七〇年の初めから、女にとってもっと平等な社会をつくるために、ずっと外の改革を押し進めてきたのですが、民主的な社会が実現しても個人の人間ひとりひとりが幸せでなければ意味がないのだと気づいて、八七年に自尊心（セルフ・エスティーム）の大切さを説いたこの本を書き始めています。

グロリアと共に私が深く敬愛するアメリカの近代絵画のパイオニア、ジョージア・オキーフは、一九世紀終わりから二〇世紀初頭にかけて台頭した第一波女性解放運動に深く関わった人です。彼女の場合はグロリアとは逆に、自分

自身の内面を深く洞察して、絵を描くということをはたすら追求しつづけてきた結果、外界の社会の変革も重要だということに気づいて運動に関わっている。

一方、職場、教育、マスコミ、法律などあらゆる分野での私たちの平等を求めてフェミニスト運動のリーダーの一人として走り続けてきたグロリア・スタインムが、自分自身の心の問題に気づいたのが八〇年代半ば。

私にとってこの二人はとても大切な宝物なのです。この本を訳し終えたときに、私のなかで二人がピタリと一つになった。この二人に共通しているのは、表面的な権威よりも人間そのものを信じていること、自らに正直、外見と日々の生活の細部にまで漂う本物の優美さ、そして常に自分の力のすべてを注いで生み出される作品の圧倒的な素晴らしさです。

マスコミの影響もあるのですが、日本では、「アメリカはお金ですべての物質社会」で、「日本は精神に価値を置く崇高な社会」といまだに思い込んでいる人が多いみたい。しかし私の経験では、現実にはちょうどその逆で、特に最近の日本人の物欲の凄まじさには目も当てられない。

オキーフとグロリアの他に、私の人生の師にウイلمット・ラグズデイルという、ウイスコンシン大学ジャーナリ

ズム科の教授がいます。政治的には進歩的でも、絵画や小説、芝居など、前衛的なものなどまったく理解できず、保守的で閉鎖的な殻に閉じこもっていた当時の私に、アンデイ・ウォホールやリキテンスタインのポップアートやトゥルーマン・カポータイの話題のノンフィクション『冷血』など、次から次へと新しい文化の重要な動きを教え、もっと広い世界へと目を開かせて下さったのが彼です。

同大学ジャーナリズム科始まって以来の人気教授だった彼は、八七歳のいまでも一人でシアトルに住み、そこから車で一時間ほどの海辺に自分で建てた小屋で、大きな柿色の月を眺めながら回想録を書いています。

この四月に三〇年ぶりにクラス会が開かれ、懐しいラグズデイル教授と再会した折りに、昔の授業の独り言のような口調そのままに、彼が私に話されたことが印象に残っています。

グロリア・スタインムが、先に私のしたインタビューのなかで、「成功」の定義を、「富とは関係のないもの。一人ひとりが自分のユニークな才能を役立たせること、他の誰にもできない方法で社会に貢献すること。そしてそこから生まれる充実感と満足感」としたことについてどう思われますかと訊ねると、ラグズデイル教授はこう言われました。

「グロリアのいうことはもっともだけど、問題はすべての人にユニークな才能が備わっているわけではない、もしくはその才能を生かせる場がないということなのだよ。大半の人は自分は巨大な組織の歯車の一つでしかないと感じている。チャップリンには七〇年も前にそのことが見えていて、あの『モダンタイムズ』をつくった。つまりユニークでクリエイティブな人ばかりでは、自動車は生まれないのだよ」と。

自分を歯車の一つとしてしか感じていない人たちも自分の心を大きな喜びで満たすことができるような社会をどのようにしてつくりだすことができるのかと、赤い月が真っ黒な水平線に現れ、やがてそれがゆっくりと弧を描いて上空の星たちの仲間入りをするまで、文字通り時を忘れて、ラグズデイル教授と語り明かしたのです。

特集 多様なフェミニズム



ベル・フックスと日本の女たち
堀田 碧

このところ、アメリカの黒人フェミニスト、ベル・フックスの本を読む女性たちの集まりに参加している。ひとつの集まりでは、「教育」についての本（「Teaching to Transgress」）を、年令もさまざまなら、国籍も、生きてきた背景も、多様な女性たちが、読んで話し合う。もうひとつは、少女時代の思い出を書いた本（「Bone Black」）を、読みながら訳してみようというもの。わたしにはどちらとも楽しく、いま、日本の地で、ベル・フックスを読むことの意味について考えさせられる。

ベル・フックスを知っていますか？

それにしても、欧米の、とりわけ英語圏でフェミニズムに関心のある人ならたぶん知っているにちがいないベル・フックスが、日本ではまったくといっていいほど知られていない。こう言っているわたし自身、五年前にイギリスで女性学のクラスに参加するまで、まったく知らなかったのだ。

もともと、知られないのは、ベル・フックスだけではない。黒人フェミニズムというジャンルそのものが、マイナー中のマイナーあつかいである。そもそもフェミニズムとか女性問題自体が、圧倒的に周縁に追いやられているこの国で、それでも、欧米の主流の、主に白人中産階級女性を

担い手としたフェミニズムはなんとか漏れ伝わってくるものの、黒人フェミニズムだとか第三世界のフェミニズムだとかは、はじつこの、そのまたはじつこに位置づけられて、ほとんど伝わってこない。それはいまなお、日本において、「特殊」なものとされ、けっして「フェミニズム一般」のなかに位置をしめることもなければ、日本の女性たちの現実と重ね合わされることもない。

でも、いろいろなフェミニズムがあるなかで、なかなか一筋縄ではゆかない日本社会の現実と向き合っている女性たちに役立つのは、実は黒人フェミニズムではないかと、わたしは思っている。そう思わせたのが、とりわけ、ベル・フックスだった。

ベル・フックスの名は、はじめてもらった女性学の参考文献リストのなかにあった。

まず目立ったのは、名前が、*Bell Hooks* と、小文字で書かれていることだった。ミスプリントではないかと思つたずねると、「まちがいじゃないわ、彼女はそうなのよ」という答え。いあわせたクラスメイトたちと、「なぜなのか」をめぐるって、あれこれ言い合つたことを思い出す。ようやくわかつたことは、ベル・フックスというのはペン・ネームで、彼女はそれを祖母（あとで曾祖母と判明）

からとつたらしいこと。小文字にしたのは、「ビッグネームではない、ひとりの黒人女として」といった意味らしいこと。ふーん、なんだか、変わった人らしいな、というのが、わたしの第一印象だった。

同じく文献リストにあった黒人フェミニスト作家アリス・ウォーカーより八才年下の南部ケンタッキー生まれのベル・フックスは、美術や文学を専攻して大学院を終え、やがて大学で教えるかたわら、一九八一年に『*Woman*』（わたしは女じゃないの？）を書いて、黒人フェミニスト批評家としてデビュー、その後も、フェミニズムと黒人女性、人種差別主義、文化などについて精力的に執筆をつづけ、当時すでに四冊の著作が出版されていた。

女性学のクラスがはじまり、わたしはつぎつぎと、黒人フェミニズムの著作に出会うことになった。アンジェラ・デイヴィス、アリス・ウォーカー、オードリ・ロード、バーバラ・スミス、パトリシア・ヒル・コリンズなど、アメリカの黒人フェミニストたち。そして、ヘイゼル・カービー、クム・クム・バヴァニ、アヴァター・ブラー、プラティバ・パーマーなど、インド亜大陸系をふくむイギリスの黒人フェミニストたち。読んでゆくうち、彼女たちの主張が「特殊」であるとは思えなくなつた。むしろ、わたしにと

って、黒人フェミニズムの主張は、これまで感じてきた「フェミニズム」への「違和感」を埋めてくれるものだった。なかでも、ベル・フックス。「ラディカル」という言葉に「急進的」と「根本的」というふたつの意味があるならば、ベル・フックスは、そのふたつの意味で「ラディカル」だ。「言いにくいことをズバリと言う」ラディカルさ。「黒か白か」的な決めつけを避けて、つねに、よい意味で「脱構築的」であろうとするラディカルさ。

わたしは、心のなかで、喝采した。

フェミニストの「常識」に挑む

ベル・フックスは、主流派フェミニズムの「常識」を、痛烈に批判する。

たとえば、「女性にとってもっとも大切なことは、家庭の外で仕事につくことだ」と主張したベティ・フリーダンに向かって、ベル・フックスはこう言う。

「この社会で女性がおかれている状況をあらわすのによく引き合いにだされる、ベティ・フリーダンの有名な言葉『名前のない悩み』は、実際には、ある特定の集団、大学教育をうけた中・上流階級の結婚している白人女性……暇をもてあまし、家庭にも子供にも物を買うことにもあきあ

きして、もっと実りある人生をと願う主婦たち……の悩みについて言ったものだ」

そして、そうした中・上流主婦にとつての「夫や子供や家庭以上のなにか」とは「キャリア」だとするフリーダンを、そういう女性たちがキャリア・ウーマンになって「外へ出た」あとで「子供の面倒をみたり家事をしたりするために呼びいられる女性たち」や、そもそも「夫や子供や家のない女性たち」について語らない、と批判する。ベル・フックスは、フリーダンの業績を認めるし、有閑階級の女性の問題もまた「現実」であると認める。しかし、「フェミニズム」の名のもとに、「白人」「中産階級」の女性たちの問題だけがとりあげられ、「性差別的な抑圧のいちばんの犠牲になっている女性たち」が無視されるなら、それはおかしい、と言うのだ。

こうして、黒人女性の立場から、フェミニズムの主流をなしてきた「白人・中産階級フェミニズム」を批判しながら、ベル・フックスの視線はここにとどまらない。

まず、「キャリア至上主義」フェミニズムが、大多数の女性たちを「フェミニズム」から遠ざけてきた、と指摘する。「白人・中産階級フェミニズム」が「家庭の外に出て仕事につきなさい」というとき、その「仕事」とは「高給

のキャリア職」のことであって、「低賃金職にいたりたり家政婦になったり」することを想定してはいない。しかし、生活のために働いてきた、また、働かざるをえなかった大多数の女性にとって、「仕事の現実」は「高給のキャリア職」とはほど遠い。体験をとおして「仕事とは個人的満足を得られるものでも解放的なものでもない」と承知している」貧しい労働者階級の女性たちは、「家庭の外に出て仕事を」という「フェミニズム」に背を向けた。もしも「キャリア至上主義」の代わりに、「女性の働く権利を守れ」とか「女性のための職場環境の改善を」と言っていたならば、フェミニズムはすべての女性のための運動とみなされていただろう、とベル・フックスは言うのだ。

さらに、こうした主流派フェミニズムの「仕事」への態度の背後には、女性たちが、自分たちのやってきた仕事の価値を低くしかみない傾向がある、とベル・フックスは指摘する。女性たちが伝統的にやってきたのは、低賃金の、あるいは無償のサービス業（家事をふくむ）である。そしてそれらは、低賃金や無償であることが失敗や不成功や無能と同義であるとみなされてきたこの社会で、低い評価しか与えられてこなかった。伝統的に、「仕事」の価値は「交換価値の観点のみではかる」よう教えこまれ、「仕事を、

尊敬や鍛練や創造などとみなすような態度」は培われてこなかった。抑圧された集団によく見られるように、女性たちもまた、強者がおしつける価値観を内在化してきたのである。だから、フェミニズムは、伝統的な「仕事」概念のうえにたつて、いわばその裏返しとしての「キャリア至上主義」にはしるのでなく、むしろ「仕事の本質」を再考すべきだと、ベル・フックスは言うのだ。

「男性は敵」なのか？

もうひとつ、ベル・フックスが「男性は闘う同志」と言い切ったときにも、その「常識破り」に、わたしは喝采した。それまで、フェミニストの「男性敵視」感情に違和感を感じながら、わたしには「それはちがうんじゃないの」と言えなかった。反男性感情は、ときとして、「どれだけフェミニスト的であるか」を測るものさしのようにさえあつかわれ、「それは健全でない」と感じることは「男性を免罪するもの」と片づけられがちだった。それに対して、ベル・フックスはこんなふう言う。

まず、「女は犠牲者」「男は敵」という主張は、「男と女は対極関係」「女が強くなれば男は損をする」といった伝統的な「女性敵視」イデオロギーの裏返しであり、男性と

ともにポジティブな体験を積み重ねることの少なかつたブルジョワ白人女性の「階級の特権を平等にあたえてくれない男性」への嫉妬と怒りの表現である、と指摘する。こうした女性たちは、「あらゆる集団の男性たちをひとくくりにして、かれらが男性的特権を平等に分かち合っている」かのように主張し、「ブルジョワの白人女性は、性差別の犠牲になることがあるにしても、貧しく教育もない非白人男性に比べれば、搾取され抑圧される可能性が低いという事実」を認めようとしめない。そして、こうした「白人・中産階級フェミニズム」の「反男性的スタンス」は、なによりもせっぱつまつた生活上の必要から男性と関わらずにいられない圧倒的大多数の女性たちをフェミニズムから遠ざけ、男女の相互関係の変革の可能性を閉ざしてしまい、また、ともに闘うべき男性の参加を拒絶してしまつた、と批判する。

そして、男性と抵抗運動を分かち合つた体験をもつ黒人女性は、反男性的な白人ブルジョワ・フェミニズムに共感しなかつたが、それは、黒人男性から性差別を受けているという現実を認識しないからではなく、男性と共有する闘いがあること、また、性差別的抑圧のもとで男性もまた傷ついていることを知っていたからだ、と言うのである。

しかし、ベル・フックスはここで、「性」に対して「階級」や「人種」を対置するという「古臭い」手法におちいつたり、「だから、女性も男性も犠牲者なのだ」と問題を終わりにしたりはしない。ベル・フックスは言う。

「男性は、性差別によって搾取されたり抑圧されたりするわけではないが、その結果として苦しむことがある。この苦痛を無視してはならない。男性が経験する苦痛は、男性の女性への虐待や抑圧の深刻さを軽減するわけでもない、搾取的な行為に対する男性の責任を相殺するものでもないが、それは変革の必要性に気づくための触媒となりうる」

そして、この「男性の苦痛」を分析する。

まず、「貧しい男性は、男に生まれたことで所有している特権があるのだと吹きこんでくる性差別的なイデオロギーを通じて社会化されてきながら、自分の人生にそうした利益があたえられていないことに気づかされる」。そして、「自分が教えこまれてきた男らしさという観念と、その観念にしたがつて生きられない自分とのあいだの矛盾」に悩む。そんな男性が、疎外感や苛立ちから、女性を攻撃したり、残虐にあつたつたり、抑圧したりすることもありうる。そういう男性は、特権を行使しているわけではなく、「自

分に唯一残されている支配の形態を行使することで満足を
得ている」だけであり、「鬱屈した男としての攻撃を女性
たちに向け、性差別や資本主義に向けない男性」は、自分
にはほとんど利益をあたえてくれない体制の維持につくし
ているだけなのだ。「そんな男性は抑圧者である。彼は女
性の敵である。彼はまた、自分自身の敵でもある。そして、
被抑圧者でもあるのだ」と、ベル・フックスは言う。

こうして、男性が、「抑圧者としてふるまいながら抑圧
されてもいるプロセス」を、ベル・フックスは、なにより
も「労働者階級の貧しい黒人コミュニティの男性たち」に
見ている。そして、フェミニズムは、「支配者階級の男性
と、性差別を支えるよう社会化されていながら、そこから
人生を豊かにするような利益を得ていない大多数の男性た
ちとの関係」にこそ注目すべきだと言うのである。

「フェミニズムを性差別的な抑圧をなくするための運動だ
とすると、女性も男性も、少女も少年も、平等に参加でき
る」と、ベル・フックスは言う。そして、「自分にとつて
否定的で制約が多い特定の男性役割を演じなくてもよくな
るといふ利益」のためにだけ、フェミニズムを支持するよ
うな「男性解放運動」を批判しながら、男性に向つて、
「果敢にも性差別と闘おうとする男性は、フェミニズム運

動のなかに居場所を見つけれらる」と、呼びかけるのであ
る。

ベル・フックスと日本の私たち

これ以外にも、ベル・フックスの主流派フェミニズムへ
の批判は広い領域に及んでいて、ここでその全部を紹介す
ることはできない。また、その後の彼女を他の黒人フェミ
ニストとやや色合いのちがったフェミニストにしている文
化批評、とりわけ映画やラップ音楽などをふくむ「黒人大
衆文化」に関する批評については、それとして語る必要が
あるだろう。そして、そうした領域への関心とも関連して、
ベル・フックスが、黒人フェミニストとして、真剣にポス
トモダニズムに向き合おうとしていることは、わたしには
たいへん興味がある。

黒人フェミニズムやベル・フックスを知ること、フェ
ミニズムはわたしにとってより身近なものになった。それ
までわたしが「フェミニズム」と思っていたものは「白
人・中産階級フェミニズム」であり、その「日本版」であ
ることを知ったからである。

フェミニズムはえてして、比較的めぐまれた女性たちの
声をうつす。それは、ベル・フックスの言葉を借りれば

「ブルジョワ・フェミニズム」である。そして、アメリカにくらべても、高学歴で経済力のあるめざまれた女性はほんのひと握りでしかない日本の地で、「ブルジョワ・フェミニズム」はどれだけ有効なのだろうか？ひと握りでない多くの女性たち呼びかけるための、あたらしいフェミニズムの言葉が、必要とされているように思う。

わたしが女性学のクラスに在籍していた、ちょうどその年の夏、イギリスの女性学ネットワークの総会がポーツマスで開かれた。そのオープニングの講演者のひとりとして、ベル・フックスがやってくると聞いて、わたしはクラスメイトとふたりで出かけていった。

ポーツマスはイギリス南西部の港町で、その町中にあるポーツマス大学の、白大理石の円柱とライオン像のある講堂が、会場だった。夏らしいカジュアルな、色とりどりの服装をした数百人の女性たちで埋まった講堂の壇上から、まっ黒なブラウスに黒いストラックス、大きな赤い数珠玉のネックレスをした、ショートカットのベル・フックスは、予想していたよりもやや高いソフトな声で「文化帝国主義」について語った。

実を言うと、そのときのベル・フックスの話も、その後の会議も、ほんやりとしか覚えていない。ただ、覚えてい

るのは、話を聞きおわって講堂から出たときの真つ青な空の色と、そのあとでクラスメイトとふたりして、ベル・フックスを見たことに興奮しながら歩いた海辺のプロムナードの景色だ。そのときの、つきぬけるような解放感を思い出す。

いま、イギリスからも、そしてベル・フックスの住むアメリカからもはるか遠くはなれた日本の地でベル・フックスを読みながら、かつてないほどベル・フックスを身近に感じることもある。ときには、わたしに代わって言ってくれるはずの彼女の「ラディカルさ」を、熱望することもある。でも、同時に思うのは、「あたらしい『本当の』フェミニズム」を探したり、「あたらしい代弁者」を求めたりするのは、もうやめようということだ。フェミニズムって自分からはじめるものだと思うから——他の女性たちや男性たちへの共感を支えにして。

本文中の引用は、すべて『Feminist Theory : From Margin to Center』(1984, South End Press, Boston)による。訳は筆者による。

(ほった・みどり／英国ケント大学女性学修士課程終了。現在、文筆・翻訳業)

特集 多様なフェミニズム



私はフェミニスト失格？

吉原 令子

フェミニストはいきすぎ？

「生か、死か、それが問題だ (to be or not to be, that's a question)」こういったのは、シェイクスピアの『ハムレット』の主人公である。フェミニズムに出会って以来、フェミニストとして生きるべきか、やめるべきか、それは私にとって大きな問題となった。

フェミニズムとはいったい何だろうか。英和辞典で「フェミニズム (feminism)」という単語を調べると、「女性解放論 (主義)、男女平等論 (主義)」としか載っていない。日本よりもずっと進んでいると思われるアメリカでさえも、最近、自分のことをフェミニストと呼ぶ女性が少な

くなってきたといわれている。一九九三年の統計では、九〇%の女性が現在でも性差別は存在すると答え、八四%の女性が避妊に賛成しているものの、若い世代ではたった一六%の女性しか自分のことをフェミニストとは呼ばないという結果がでている。しかし、若い女性たちが自分自身をフェミニストとは呼ばなくなってきたのは、アメリカだけの話だろうか。

フェミニストは無駄毛を剃らない？

私にも自分のことを何のためらいもなく「フェミニスト」と呼んでいた時期がある。それは、辞書に載っている「フ

エミニズムⅡ男女平等論」、つまり、公的な域における男女平等だけをフェミニズムと考えていた頃だった。私は女性学で大学院に進もうと決意し、意気揚々とアメリカ・ミネソタ州に乗り込んでいった。しかし、そこで出会ったのは、脛の毛も、脇の下の毛も剃らない女性たちだった。化粧もせず、ブラジャーもつけず、髪形は男の人のようなショートカット、服装もTシャツとスボン。そして、「女性学部にいる人たちって、みんなレズビアンなのよ」という周囲の奇異な目。これがフェミニズムの実態なのだろうか。

大学院の講義でも一九六〇年代後半から七〇年代にかけてのラディカルなフェミニズム理論を学ばずば学ばず、私が今まで頭に描いていた「フェミニズム」と「男女平等論」という言葉の間に大きな溝が広がっていった。ラディカル・フェミニストたちがミス・アメリカ・コンテストに抗議して、ハイヒール、髪のカールクリップ、ガードル、ブラジャーなどを女らしさの抑圧のシンボルと糾弾し焼捨てたということを学べば、「そんなことまでしなくても……」と思ってしまう私があった。私は花柄の服もスカートも大好きだし、時にはオシヤレをしてハイヒールを履いて出かけた。ピアスもするし、口紅だって何本も持っている。大卒に行く前に化粧をし口紅をつけ鏡にむかって「ニー」と

微笑む自分を見て「私もまんざらではないぞ」と思う。しかし、鏡の中の私が「女らしさという抑圧からの解放を目指し、フェミニズムを勉強しているあなたがこんなことをしてもいいの？」とささやく。「フェミニスト失格。私はフェミニストにはなれない」と鏡に向かって言うのだった。また、授業で「フェミニズムの究極の選択レズビアン」というエッセイを読んだ時、フェミニズムを一字一句実践で追求しようとする、レズビアンという生き方しかできなくなってしまうのではないかという恐怖が襲ってきた。

結婚は合法的なレイプ？

「男は、性交という女所有によって、女を占有し、支配し、女に対する基本的な優位を表現する」(アンドレア・ドウォーキン「インターコース」から)

「女性の抑圧はいろいろな制度の中に明らかにあり、功妙につくりあげられ、女たちをその居場所にとどめておくために維持されている。これらの制度とは結婚、母性、愛そして性交である」(ニューヨーク・ラディカル・フェミニストの宣言書「エゴの政治学」から)

これらの言葉を聞いて、私は「フェミニストになったら、セックスをしてはいけないのではないか？」と思ったこと

がある。「ボーイフレンドと身体をよせあつてベッドの上で転げ回っているのは楽しい」といったら袋叩きにされるのではないかと思つた。

女性学の授業で取り上げられる「セックス」は、女性への性的暴力であつたり、男女間の支配と従属の関係を理論的に解明したもののばかりであつた。また、ボルノグラフィでいかに女性が性の対象物として描かれているかを討論したこともある。そして、「ボルノ反対」のプラカードをもつて町中をデモ行進し、ボルノグラフィを売っている本屋や大学のブックストアの前でピケをはつたこともある。「セックス＝暴力」という構図が私の中で少しづつ構築され始める一方、その構図を自分に置き換えた時「私がしているセックスも支配と従属であり、暴力を受けていることになるのだろうか？」と疑問に思つてしまふ私がついた。

レベッカ・ウォーカーは、私にとつて喜びとしてのセックスを語る初めてのフェミニストだつた。ここで、ちよつとレベッカ・ウォーカーの説明をしておく、彼女は「カラー・パープル」や「母の庭をさがして」で有名なアフリカ系アメリカ人女性作家アリス・ウォーカーの娘である。現在、アメリカのフェミニスト雑誌『ミス』の編集をがけ、自らを第三波フェミニストと名のり、若いフェミニニ

ト・グループ「第三の波」の創立者でもある。彼女はエックセイ「自由を求める」(Lusting for Freedom)の中で、「私は若くしてセックスをした。初体験後、セックスが大好きになつた。昼も夜も、私は最初のボーイフレンドと大きなベッドで転げ回っていた。そして、身体と身体がふれあつて心地よいと感じる方法は可能なかぎりすべて試してみた」と自らのセックス体験を語っている。そして、セックスが喜びや自信をもたらすものであり、恥ずかしいことではないのだと語っている。

私はこれだと思つた。そして、なんだかとてもうれしくなつた。私が待つていたのはエンパワーメントとなるセックス論なのだ。女が性の対象物として描かれるセックス論や男女間の支配と従属の関係を解明したセックス論ではない。もうそんなものにはうんざりだ。レベッカ・ウォーカーは最後にこう語っている。「問題なのは、若い女性がセックスをするか、しないかではない。(中略)問題なのはむしろ、若い女性がダイナミックで、肯定的で、安全で、人生の喜びであると思えるようなセックスをするにはいったい何が必要なのか、ということである」

私はセックスについて今まで他人に語つたことがなかつた。「セックスは喜びである」と語つてしまつた後、「セッ

クスは暴力だ」と叫ぶフェミニストたちから、いったいどんな反応が返ってくるのかと想像するだけで怖かった。しかし、それだけではない。私には、「セックスとは後ろめたいもの」という思いがあつたからだ。私が望んでいるものは喜びのセックスであり、肯定的なセックスであり、何よりも、パワーを与えてくれるセックスなのである。

「女は抑圧されている」から生まれるフェミニズム？

「私たち女はこの男性中心社会から、そして、伝統的な家長制から抑圧されているのだ。だから、女性を解放するために闘おう」

私はこの手のスローガンがあまり好きになれない。フェミニズムに関する本の中には、男性中心社会、家長制、男性優位主義という中でいかに女性が抑圧されているか、そして、女はいかにその性ゆえに劣った階層へと区別されるようになってしまったか、が延々と書いてあるものがある。留学していた頃、大学院の授業に出れば、アフリカ系アメリカ人の女子学生がいかにその人種ゆえに女性ゆえに抑圧されているかを主張する。シングル・マザーで州からフードチケットをもらって生活している女性は低所得者階級の女性たちがいかに抑圧されているかを話す。また、性

的暴力の被害者である女性は痛々しい体験を語る。しかし、私には彼女たちが話すような「抑圧」の経験がなかった。クラスの中で私はますます無口になっていった。いや、彼女たちが受けたような「抑圧」の経験がない私はフェミニズムを語る資格がないと思つてしまった。

幸運にも、昔も今も私はお金に困つたことがない。離婚もしたことなくければ、シングル・マザーでもない。ボーイフレンドから暴力をうけたこともない。アメリカにいるときには人種差別に遭い、いやな体験もしたけれど、「私はいずれ日本に帰る身。この国に一生住むわけではなし……」とどこかで他人事だつた。「女だから……」といわれて大学進学をあきらめなければならぬという経験もなかった。学生運動もウーマン・リブも体験したことがない。安保はテレビの画面でしか知らない。私が大学を卒業した頃はすでに男女雇用均等法が施行され、企業の中で女であるゆえに昇進ができないとか、初任給が男性よりも低いという目に見えるような明らかな性差別はすでになかった。もちろん、幼い頃を振り返れば、赤やピンクの服を着せられたとか、「女の子らしくね」と母からいわれたとか、心当たりはあるが、5、6歳の私が「これは性差別だ」などと主張するわけがない。こういう体験は後になって「そーい

えば……」と気づくものである。

私と同じ世代で、いつたい、どれだけ「抑圧された体験」からフェミニズムに目覚めたという女性がいるだろうか。差別が昔よりもっと巧妙になってしまった現在、ジェンダーに限らず、人種／民族、セクシャリティ、階級、年齢などによる差別はもっと見えにくく気づきにくいものになっている。私自身、「どうしてフェミニズムに目覚めたの？」と質問されたら、少し返答に困ってしまう。私がフェミニズムという言葉を知ったのは、大学の教授が講義中に話した何気ない雑談からであり、フェミニズムの本を読んだり勉強を始めたのは、アメリカで女性学の授業をとるようになってからだった。

最近、私が読んだ本の中に『聞いてーフェミニズム次世代からの声』(Listening Up: Voices from the next feminist generation)というものがある。アメリカの20代の女性たちが中心になって書いたエッセイのアンソロジーである。その中で、多くの若い女性たちがフェミニズムに出会ったきっかけやフェミニズム論を展開している。私のように大学の授業で女性学をとってフェミニズムを知った女性もいれば、母親がフェミニストだったからという女性もいる。フェミニスト作家であるベル・フックスやオー

ドリ・ロードの本を読んで感化された女性もいる。また、エイズや摂食障害など女性と身体というテーマからフェミニズムに目覚めた女性もいる。

日本の若い女性たちもフェミニズムに目覚めるきっかけは様々なのではないだろうか。「このままではいけない？」という気持ちから区や市で行われている講座に出席してフェミニズムに出会った女性もいれば、祖母の介護を通して性役割分担を疑問に思った人もいるだろう。アメリカの若い女性たち同様、大学の授業やフェミニズム関係の本からフェミニズムに目覚めた女性もいるだろう。また、これだけ多くの女性が海外留学をしているのだから、海外でフェミニズムを知った女性たちも少なくないだろう。

今はフェミニズムを知るきっかけもフェミニズムに対する考え方ももっと様々なのだ。抑圧された体験だけからフェミニズムに目覚めるわけではない。「抑圧された体験」だけを語りあうのはひどく気がめいることなのに。

私もフェミニスト

フェミニズムは「十人十色」といわれるように、普遍的なフェミニズムは存在しないのだ。普遍的なフェミニズムをつくらうとすれば、その枠に入らない女性たちを排除し

てしまうことになる。リベラル・フェミニズムがレズビアンを排除したように、ラディカル・フェミニズムが「女」という言葉であらゆる女性を一括りにし、女のなかの多様性を無視したように、そして、白人のフェミニストたちが長い間人種の問題を無視し続けたように、周縁に追いやられたはずの女性がその枠に入らない女性たちを周縁のそのまた周縁へと追いやってしまったのだ。

「フェミニズムとはこういうものだ」という定義なんかないのだということに私は気づいた。いや、定義をつくってはいけないのではないかとさえ今は思っている。もちろん、定義のないものはつかみどころのない理解されにくいものとして他者から非難される格好のターゲットとなるかもしれない。しかし、定義がないからこそ、多様で豊かなものとなる可能性を秘めている。そのことに気づいたのは日本に帰ってきてからであった。そして、私が自分のことをフェミニストと呼べるようになったのは、日本にいるフェミニストたちに出会ってからだだった。売買春を「セックス」という仕事として容認するフェミニスト、在日韓国人という視点にたつてレイシズムを語るフェミニスト、セクシャリティについて語る在日のアメリカ人フェミニスト、アメリカだけが多様なのではなく、日本だって、考え方も、人

種／民族も、セクシャリティも、すごく多様なのだ。彼女たちは自分たちの形で、色で、言葉で、彼女たちのフェミニズムを語る。そして、何のためらいもなく、自らをフェミニストという。

私が自分のことをフェミニストと呼べなかった理由は、あるひとつのフェミニズムの中になんとか自分を押し込めようとして、その枠内に押し込めきれない己の姿があったからだ。そして、もうひとつ私に欠けていたのは、「私」のフェミニズム、つまり、主体性の欠如であった。私の心の裏側には、常に周囲にこんなふうに使われたくない、あんなふうに使われたくないという気持ちが存在し、「周囲の目」と「私」の間で揺れる私があった。

ひとつではないフェミニズムに気づき、「周囲の目」をちよつとわきに蹴飛ばしてみたなら、「化粧をしてハイヒールを履いて無駄毛を剃って、私のフェミニズムをやった方がいいじゃない」と思えるようになった。

フェミニスト失格？とんでもない、私だってフェミニストだよ。

(よしはら・れいこ／大学講師)

グロリア・スタイネムの『ほんとうの自分を求めて』(中央公論社/二八〇〇円)は博識かつ明晰ながら全編肯定的なメッセージに溢れ、とりわけ、中高年期からもうひとつの人生を生き直そうとする人たち(男女を問わず)への魅力に満ちた最良のガイドになっています。

女性の権利促進の政策によって女性団体に支持されているクリントン大統領のセクハラ疑惑に関し、フェミニストたちが沈黙を守ってきたことを保守派やマスコミが偽善とみなして攻撃する中、彼女はニューヨーク・タイムズ(1983年)に寄せた記事のなかで、「もし訴えが事実とすれば、クリントン氏の振る舞いは極めて下劣、愚か、粗野である」が、相手に拒否されると「ノー」の答を受けとめて二度と同じことを繰り返してはいないので「セクシュ

アル・ハラスメントには当たらない」、「ノーはノー、イエスはイエスを意味する」という単純明快な原則こそ、セクシャルハラスメントに関する法律の根本原則でもあるのだ」と胸のすくような明快な論旨を展開しています(このことについては、女性団体のクリントンへの抗議の動きに焦点を当てた報道の多し中、東京新聞の四月三日付夕刊に道下さんが丁寧に分析した記事を書いていらっしゃいます。文中のグロリアの言葉は道下さんの記事からの引用です)。

昨年出版された『ブラック・フェミニストの主張』(勁章書房/二六〇〇円)は、この号で堀田碧さんが引用しているベル・フックスの名著『Feminist Theory: from Margin to Center』の翻訳です。訳文がもつと読みやすければというらみはありますが、この時期に彼女の著作がはじめて邦訳されたこ

とはほんとうに嬉しいことです。(ベル・フックスの自叙伝『Bore Back』はフェミニクスの英語講座の教材です。原文で読んでみたいという方、ぜひ参加して下さい)。

もうひとつお勧めは『女はみんな女神』(新水社/一三〇〇円)。著者のジン・シノダ・ボローレンはユング派の分析家で日系アメリカ人。女性解放運動に関わり、グロリア・スタイネムと共に「意識と良心」というグループを結成し活躍。従来のユング派における一面的な女性観を批判して、女性の多様性を強調する新しい女性心理学を構想した本書は、ギリシャ神話から7つの女神の元型を取り出し、読み手が自分の中にあるさまざまな女神の元型を活性化し呼びびますことで、自ら肯定的に人生を選びとって生きていけるよう示唆しています。

特集

多様なフェミニズム

「女性国会」から半年

吉田 圭子

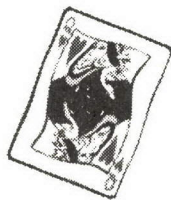
「女性国会」から半年。「議員」として参加した私の中には、あのとときの興奮と感動がまだ残っている。私は、確実に元気になって帰ってきた。その一方で、当初は見えなかった会議での限界もだんだんとクリアになってきている。以下に、一参加者としての感想を述べたいと思う。

参議院五十周年記念行事として昨年十月三・四日に開かれた「女性国会」には、全国から一六〇九名の応募があり、抽選で「議員」に当選した二五二人が、「食と水と緑」「環境・エネルギー」「女性が考える教育改革」「女性の人權」「働く女性」「少子・高齢社会」「女性と国際協力」「女性の平和への貢献」「女性の政治参加・政策決定」「女性と

経済政策」の一〇委員会に分かれて話し合った。日程は、三日が国立青少年オリンピックセンターでの全体説明、委員会打合せ、記念パーティ、本番の四日が国会での委員会、本会議という流れで進められた。

私が所属した「女性の人權」委員会での話し合いはどれも印象深かったが、一番に残ったのはスケジュールにはない、初日夜の話し合いだった。

「記念パーティ」を終えてベッドに入ろうとホールを歩いていると、「女性の人權」委員会のメンバーが、ロビーで昼の「委員会打合せ」討論の続きを始めるところだった。



誰からともなく集まったという。あたりを見ると同じように話を始めたグループがいくつもあり、ロビーはざわざわしていた。イスが足りなくて立ったまま参加している人もいる。

わが「女性の人權」委員会ではやはり性暴力が話の中心となったが、昼とは比べものにならないほど密度の濃い討論になった。日常的なセクシャル・ハラスメント。夫からの暴力。暴力を逃れ、避難した福祉施設での人を人とも思わぬ扱い……。何人もの人がさまざま暴力被害のサバイバーであることを語り、記憶を呼び起こしながら体験を語った。

暴力被害のサバイバーには心身のケアを。訴え出た警察で安心して話せるように女性の警官を配置してほしい。「あなたは悪くない」という周りのサポートが何より必要。当然すぎるほど当然の声、声、声。「今日までこんなことを話せる場がなかったんです……」。その言葉を皆がじっと聞いていた。

翌四日、いよいよ国会議事堂入り。午前中は速記者、現職議員、傍聴人が同席する委員会で全員が発言。午後はこれをたたき台に各委員長・副委員長が意見をまとめ、本会

議で報告する。

本会議での感激は一生忘れないだろう。午後二時に始まった本会議は、数名の欠席はあったものの、参議院の二五二議席すべてが女性で埋めつくされた。傍聴席の六〇〇席は満席。マスコミの取材も、この二日間で最大にふくれあがっている。

会議では、各委員長が三分という短い時間でありながら、正々堂々と主張を練り広げた。共感を得た意見や「皆さん、頑張りましょう！」との呼びかけには、そのつど会場がわいた。

「女には政治はできない」などと、一体誰が言ったのだろう？ こんなに生き生きとした議会を、私はかつて見たことがない。ほとんどが地方からかけた女性たちである。根強い偏見と日々闘いながら、皆ひそかに力をつけていたのだ。

最後に、あらゆる分野、あらゆるプロセスにおいての女性の参画をうたった「女性国会宣言」が満場一致で採択され、しばらく鳴りやまない拍手の中で「女性国会」が終わった。あたりではこの二日間の体験をわかちあった女性たちがますますネットワークを広げ、仲間との別れを惜しんでいた。「来年もまたやろう！」そんな声があちこちで飛

んでいた……。

あれから半年が経って

私の「女性国会報告」はここでめでたく終わるはずだった。だが、あれから半年が経ち、日常の暮らしに戻ってみると何も変わっていないのである。確かに細いながらもネットワーク的なものが生まれ、電話や手紙で連絡を取り合う仲間ができた。しかし、そこから何をめざすのか。ネットワークをどう生かせばいいのか。

反省をこめて振り返れば、私たちに一番欠けていたのは意見をぶつけ合い、研ぎ澄ませていく過程だったと思う。短時間で広いテーマを話し合ったために、意見が分散して具体的な戦略にまでは高められなかった。

また、討論に慣れていないせいで話し合いが暴走しそうになったこともある。あるとき性暴力について話し合っていたら、「母親こそが子どもを教育しなければ」という意見が、子どもを持つ人を中心にワッと広がったことがあった。私はその意見には疑問を感じたが、場の雰囲気を押されて黙ってしまった。他の人も黙っていたが、後で話してみると賛成ではなかったという人もいた。「母親が教育を」と

いっても、父親はどう関わるのか。子どもを操作することにつながるのではないか。どんな教育をどのようにするのか。なぜ母親なのか。これらの検討なしに、その場のノリだけで意見を一色に染めあげてしまうのはとても危険なことだと思う。

この他にも、「自分が何をするか」という視点がぜひ必要だと感じた。議事録を読んでも、「議員の『先生』に（国に、行政に）こうしてもらいたい」と発言する人は多いが、「私はこうする」とはつきり示す人は少ない。欲しいものを手に入れるためには、自分が誰で、何を望み、そのために何をする用意があるのかを、もう一度問い直す必要があるのではないだろうか。それは、言うべきことを言わなかったり、逆にただ周りに同調することからは最も遠いところにある作業だと思う。

やるべきことは何と多く、道のりは何と長いことだろう。それでも「女性国会」では、たくさんの女たちが出逢った。一人ではないと知った女たちは、大きな荷物を抱えつつも「女性国会」の要らなくなる日までずっと歩き続けるだろう。

「女性国会」は、大きな始まりの日だったのだ。

（よしだ・けいこ）

のツクホ く荒風潮

江口凡太郎

新しい年度が始まりました。家政科3年生の「保育」を担当して、改めて教科書を読んで驚きました。親になって3カ月の私にとってとても役立つ内容なのです。

でも、この教科書を使って高校3年生の彼女たちにどんな力をつけたいのか？ 乳幼児の親やもうすぐ親になる人にとっては読み応えのある内容ですが、高校の授業でやるようなこと

なのでしょう？ ぼやく私に、ある同僚は「実際、すぐ親になる子もいるんだからけっこうためになるんじゃないの」と平気で言うのです。

私なりに出した結論は、まず「性」についてここでもしつかり扱っておきたい。そしてメインの子育ては、その必要が生じたときに、この地域でどこに相談すればいいのか、どんな行政のサービスがあるのか程度は知らせてい。そして、保健センターや保育所見学で、子どもと関わる仕事をしている保母、保健婦、栄養士などの専門職の方の姿から働くことについて学んでほしい。こんな思いで、進めることにしました。

でも、週4時間は進みが早すぎて理想だけではもちません。そんな中、思いついたのが絵本の読み聞かせです。育休中で部屋に山積みの妻の蔵書から人気本を選んでもらい、毎時間読んでいます。高校生相手に「いないないば

あ」や「もこもこ」を感情込めて読むのは、なんだかこっちははずかしくつて、照れました。すると、変にしらけてしまい、反省して気合いを入れて、感情いっぱい、素人の下手な読み聞かせを汗だくでやってます。そうすると、中には目をきらきらさせて、「さあ読んで！」という子どもの気分そのまま、机にあごをつけてゆったりとしている高校生もいるのです。だらーとした体勢とあまりかわりはないのですが何か違って、絵本の世界に浸りたーという体勢なのです。もちろん、だらーっとしている子や「ふんっ！」って感じで外見してる子もいるのですが、それでも、どこかで読み聞かせをしてもらった思い出と重なってるのか、教室はやわらかい感じになります。そして、そのまま気分良く時間いっぱい寝てしまう子もいたりして、これまた反省の日々です。(えぐち・ほんたろう／紋別南高校家庭科)



私の家庭科



まだまだですが……

原稿を依頼されたのですが、私自身まだ納得できるような授業があまりできません。まだ丸二年が終わったところなので仕方がないと思つてますが、甘いでしょうか？ 引き受けることについてもかなり悩みましたが、私がこれからのいい授業ができるように皆さんからアドバイスなどいただけたらうれしく思います。

私自身「教師」にはなりたかつたのですが、正直なところ「家庭科」を教えるということにはいまだに驚いています。学生時代を振り返つても、家庭科が好きだったので家は言えません。一番幅広い勉強ができそうだったので家政

山内 聡子

学科に入学したら、必然的に家庭科の教師になる道しかありませんでした。授業中いろいろな矛盾も感じています。高校時代不真面目な生徒だったおかげで、教えることの基本、「将来的に役立つ情報を取り入れること」を導き出すことができたように思います。これをふまえて、授業内容を組み立てているつもりです（組み立てていますと断定できるように早くなりたい！）。

好きな異性のタイプを聞いてみました

一年生ではまず家庭生活から入ります。基本的には、「家族、ジェンダー、福祉」を柱にして、自分と家族につ

いて考えさせます。生徒の家庭科へのイメージは、女が学ぶ教科、花嫁修業、先生がうるさい etc、私が学んだ頃とそう変わりはありません。家のことは女がやるものだという風潮も少なからずあるので、まずはジェンダーについて学び、女と男の本当の違いを考えさせる時間になっています。

男らしさ、女らしさと聞いてどんな言葉を思い浮かべるかというアンケートをとり、男女にある言葉、男にだけ当てはまる言葉、女にだけ当てはまる言葉を選ばせて、ジェンダーの説明にしています。今年、「好きな異性のタイプは？」という項目を作り、そのみ板書しました。出る出るわ、自分勝手な項目が。それを見て男女とも不満そうに「そんな奴おらんわー（いないの意味）」と叫んでいました。男子も女子も求めているのは「優しい」「明るい」の2点。男子は「料理のできる人」を求め、女子は「背の高さ」「頼りがい」を求める結果がでてきました。この結果を基に、いかにみんなが「らしさ」とらわれているかを話します。昨年はあまりしつかりやらなかったのですが、一昨年前の生徒は、「家庭科の見方が変わった」と言ってくれました。今年の生徒にも「普段考えないようなことを考えさせてくれる」と好評(?)です。

順番が逆になりましたが、今年に家族の分野では「私の

家族」という作文を書かせました。今の家族についてと将来の家族についてを四百字以上でまとめるというものです。複雑な家族の子もいるので私しか見ない、ただし合意のある人のみ担任に見せるという約束で書いてもらいました。生徒が選ぶ将来の家族は一般的なものに落ち着いてしまうので『家庭科ワークブック』（国土社）の「いろいろな生き方・暮らし方」の絵を見せ、家族とは何かを考えさせ、生徒同士でフリートークさせました。

福祉については、かなり時間をとっています。私自身福祉を学んでいたことも理由の一つですが、他にも理由があります。私は小さい頃から祖母と同居し、いわゆる「おばあちゃん子」で育ちました。ささいなことが原因で中三の頃から祖母に冷たく当たってしまいました。大学一年の春に亡くなりましたが、その時後悔の念しか出てきませんでした。すごく大切にしてもらいながら、なんてことをしたのだろうと今でも思います。だから、私の祖母へのせめてもの償いの意味も込めて、高齢者を理解しようという話をします。あとは、大学時代の経験談を交えてのボランティアの話。そして、教科書にはないのですが、障害者の話を必ずしています。これも私の家族の話になるのですが、私の弟には自閉症という障害があります。今でこそ自閉症が

ある程度認知されてきていますが、中学生の頃、雑誌で某アイドルが、ちよつとしゃべらない日が続いただけで、「自閉症になっちゃった」とコメントしているのを読んで、「自閉症を世間一般の人に理解してもらいたい」と思ったことを思い出します。ちよつと採用が決定し、卒業論文を書いているときに、この気持ち思い出しました。そして、私ができることは、高校生に障害のある人のことをたくさん伝えることだと再認識し、授業時間が足りなくても障害者の話は必ずするようにしています。

大変だった実習

二学期にはいると、衣生活の授業です。あまり得意ではないので、家庭生活のような話は省きます（何かいい教材を教えてください）。

昨年、一昨年と被服実習で「リバーシブルエプロン」を作成しました。教材自体はそう難しくなく、うまく作れば裏表着られて素敵なんです、とにかく時間がかるんです。ミシンの台数の少なさ、ミシンの古さ（生徒より長生きしている）が災いして、一時間糸通しで終わったという生徒も少なくありません。それに付け加え、このころになるとやる気がなくなっていく生徒が多く、一時間、布を前

にぼーっとしたり、おしゃべりしたりする生徒が出てきます。一昨年は、全員期限内に提出できたのですが、昨年は学年で十人ほど、期限を延ばしに延ばしても提出しませんでした。完成・提出していない⇨採点できないということの不認定にしたところ、単位認定会議で他教科の教員から「途中までやったことは認めないのか」などと言われました。結局、彼らは不認定になりましたが、「家庭科」の成績のつけ方は今でも問題にされています。

さとちゃん（生徒はこう呼ぶ）恥ずかしくないの？

三学期は保育です。「今のあなた達には、子どもの発達より恋愛のことの方が大切だから」ということで、性の問題について扱います。恥ずかしくないのかと聞かれば私もまだ二四歳、照れはあります。でも、私自身勉強してみても、高校時代にこういうことを知っていればと思つたので伝えることにしています。去年は、恋愛に力を入れてみようと思ひ、『家庭科ワークブック』の「友達とのつきあい」を使い、好きなラブソングの歌詞を書いてくる宿題を出し、人気のあるラブソングを実際に聴いて、歌詞を検討するということもしました。また、『ティーン・ガイド』（家政教育社）の「デートについて」をプリントにしたりもしまし

た。体の仕組み、避妊について、中絶について、援助交際についても考えさせたりします。一年はいつもと時間がほしいと思います。

授業を生徒にしてもらったら…

二年生では、食生活を一年間かけて学習します。そのうち調理実習は約十回。座学ではいつも居眠りしている生徒もこの時だけはいきいきしていたり、私語が多く授業が成立しにくいクラスほど実習はスムーズに進んだり、生徒のいろいろな面が見られるのでとても楽しい時間です（もちろんとても疲れます）。

昨年は、『カレント家庭科資料集』（二橋出版）の食生活の九つの内容から好きなものを選び、グループに分かれて調べて発表させました。調べるのもそんなに嫌がらず、プリントを一枚作成させると、なかなか凝ったプリントをみんな作りました。生徒が授業をしたらみんな静かに聞けなかなと淡い期待を込めて実施したのですが、それはあまり効果がありませんでした。でも、自分で調べるというのは楽しかったようです。

三学期に入ってから、エネルギー所要量の計算を教えるにあたって、ただ教えるだけでは物足りないと思い、グル

ープもしくは個人で三食献立をたててもらいました。三食のエネルギーを求め、四つの食品群の目安にできるだけ近づけ、三十品目とれるようなものというかなり厳しい条件を付けました。料理の本を見ながら「朝から焼き肉がいいー」（グループ全員で）えー」という感じでわいわいがや楽しんでいました。しかし、とても大変だったみたいです。

これからの決意（?）

住居と家庭経済は、いつもやる時間が無くなってしまう。一昨年は、住居で大学生向けの住宅情報誌を見せて、部屋の借り方を教えました。とてもうるさい（いや元気な）学年でしたが、その時間はみんな集中し最後に「初めて身になりそうな授業だった」とお褒めの言葉（?）をもらいました。今年はやる予定にしています。

私の一年の流れを書いてきましたが、ここに書かれていない部分をもっともつと研究しなければならぬと改めて思いました。これからはがんばります！

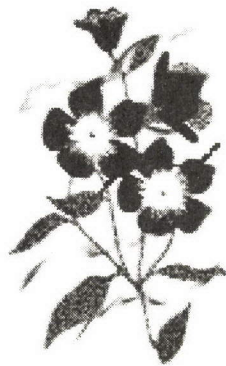
（やまうち・さとこ／愛知県・公立高校）

家庭科

風がかわる匂いがかわる

保育——自分を好きになることから始める

香川 恭子



はじめに

さまざまな経緯から、助産婦である友人や、「子ども病院を作ろうの会」に関わっている友人たちと「子育て支援ネットワーク」を立ち上げようと準備をすることになりました。

広島はけっして子育てにやさしいまちとは言えません。都心部では住環境も交通事情も悪く、もちろん自然も破壊され、文化環境も中途半端です。周辺部や山間部では、人口の減少も手伝って、行政による子育て支援事業が数多く

展開されています。しかし、子ども同士、親同士のつながりも難しく、これも安心して子育てができるということには、なかなかならないようです。また、行政の財政が逼迫する状況で、乳幼児医療など、本当に必要なとしているところに予算が配分されないという状況です。

そこで、子育てを支援する立場の人間が集まって、次の3本の柱に沿った活動を展開しようという準備を始めたのです。

一つめは、子育てに関するあらゆる情報の収集と発信です。広島市内に今年度より初めて子育て支援センターがオープンしたものの、まだ何もない状況ですので、民間のネ

ットワークで先に作ってしまおうという取り組みです。

二つめは、子育て支援人材養成講座の開催です。おせっかいな近所のおじさんおばさんを増やそうという試みです。民生委員・主任児童委員の制度が導入されて何年も経ちますが、何をしたらいいのかわからないという声を相変わらず聞きます。そのような立場の人へのアドバイスや、保育・看護などのスペシャリストの人材を眠らせないために、(結婚・出産退職で資格を持っていながら活用できていない人材がかなりあります)養成講座受講後のコーディネートまで視野に入れています。

三つめは、ここからが本題ですが、学校への出前講座のプログラムです。子育て経験者や子育て真っ最中の人、助産婦や障害児支援者、そして乳幼児たちも参加してもらう形で、生きた性教育、生きた保育学習プログラムを独自に考えて、出前講座をしようというものです。

なぜこのようなことを始めようと思ったのか……それは、子どもを産んでからでは関わりにくいということがあるからです。ひとりぼっちで子育てをしていても、それが辛いとは言にくいとか、自分がどうしたいかわからないから、ただだまって閉じこもっている、などたくさん事例に出会ってきて、子どもを産む前に、また子どもを産ま

ない人も、出産・育児に関心を持って欲しいと願ったからです(スローガンを「二十一世紀は社会のすべての大人が子どもを守り育てます」としてみました)。

子ども自身が起こした事件も、大人が子どもに向けた凶器も、それぞれに背景があるとはいえ、自分を大切に思うことができないから他の生命も慈しめない(そのように育てられてしまっている)ということも根っここの部分にあるのではと考えています。

そこで、子育て経験者やスペシャリスト(保育経験者・助産婦・ボランティア従事者他)による出前講座で、生きた性教育をしようじゃないか、妊娠・出産に関わる経験談(人としてのドラマ)や、子育ての苦労や喜びを味わってもらえるような体験学習の機会を提供しようじゃないかというわけです。昔風で言えば、おせっかいおばさんやおじさんが、しゃしゃり出て世話をやくという感じでしょいか。

自分を大切にできない!

さて、私は中学校と介護福祉の専門学校で非常勤として家庭科を担当しています。そこでいつも感じるのは、中学生はまだ未来に向けて成長する可能性があるとしても、専

門学校生は目の前に現実が突き付けられているということ
です。つまり妊娠・出産そして親になるかもしれないとい
う事実がすぐそこにあるということです。その一方で、い
わゆる受験戦争に巻き込まれて、夢破れ、自分を見失い、
自分を大切にできない学生がたくさんいるのです。ついで
に言うと、こんな学生をたくさん生み出しているのは、学
校教育システムそのもので、中学生もすでにそのレールに
乗せられているといえるのですが……。

そんな学生たちを見ていると「もつと自分に自信を持っ
ていいんだよ。もつと自分を大切にしようよ。そのまんま
でステキだよ」というメッセージを送りたくありません。

そこで、保育と称してこどものことを考えながら、自分
探しをする授業を展開してみました。

自分が小さかった頃

「目を閉じて、自分が小さかった頃のこと思い出してみて

……」

「何歳ぐらい？」

「思い出せる限り小さい頃」

いつもはガヤガヤとうるさい教室が、シーンとします。

「はい、いいよ。目を開けて。さあ、今見たものを絵に
してみようか」

「エー！（シヤレではありません）言葉じゃいけんのか？」

「いけんことはないけど、見えたとおりを描けばいいんよ」
悩みながら一生懸命描き始めます。

「これ何かわかる？」

「ああ、わかるわかる。コタツの中じゃろう！」

「アタリ！ようわかつたねえ」

「ねえねえ、これ何かわかる？」

「うーん？」

「宝物を隠しとった洞穴よ。山の斜面にちよつと穴を掘っ
とただだけじゃけど、大きく思えたんよね、あの頃は……」
あちこちから声がかかり、それを見ながら会話するだけ
でも充分楽しいのです。

「だいたい描けたかなあ？ 描けたらグループで説明しな
がら、今度は言葉で紙にまとめてみてくれる？」

再びにぎやかな教室に戻ります。

「ああ、それ私も持つとった！」

「オレの心の友はこのロボットだったんじゃ」

そこで、描かれたものを黒板に全て書き出してもらいま
す。今度は黒板を見ながら種類分けをします。出てきた分

類は「宝物」「みんなで遊ぶおもちゃ」「一人で遊ぶおもちゃ」「隠れ場所」「友だち」「おやつ」「親」「我が家」「自由な時間」でした。

「もし、これらがなくなったらどうなる？どんな気持ちになる？」と尋ねてみました。

「うーん……」考え込んでいます。

「ねえ、今みんな困ってる？」

「うん」

「私がへんなこと聞くから困ってるの？」

「それもあるけど、子どもの大切なものがなくなるのが困るよねえ」

「なくなったら困るもの何と何か知ってる？」

「……」

「権利っていうんよ。みんなが考えてくれた子どもの大切なもの、それが大事にされることは、子どもの権利が守られるっていうことなんよ。みんなが子どもの頃、それが大事にされてたかどうか、ちょっと思い出してみるといいねえ」

「大事に隠しとったのに、勝手に捨てられたことあるよ」

「そうそう、私もあるんよ。それで、その時に子どもの気持ちかがわかる大人になろうと心に誓ったのを覚えている。た

だ、どうやったたら子どもの気持ちかわかる大人になれるかっていうのが、なかなか難しい問題なんじゃけど、そのことを次の時間、一緒に考えてみようね」

子育て相談員になつてみよう！

さて次の時間、まず最初にCAPの絵本『あなたが守るあなたの心・あなたのからだ』（森田ゆり著／童話館出版）を使って、子どもの権利を尊重すること、ありのままの自分を大切にすることの意味を確認しました。

そして次にロールプレイをすることにしました。題して『子どもの気持ちかわかるモシモシ育児相談室』です。電話による相談に答えるものですが、三人一組で、一人は相談をする人、一人は相談に答える人、もう一人はそのやりとりを記録します。

質問の項目は次のようにあらかじめ用意しました。

① 今度、幼稚園にあがる子どもがいるんですが、近所の人みんな有名幼稚園を受験するので、我が子にも受けさせないといけないのでは、とあせってしまいます。どうしたらいいでしょうか。

② 幼稚園にあがってとてもはりきっています。今までグズグズしていたことも、一所懸命やるので感心して見ているのですが、最近指しゃブりがはじまりました。やめさせたいのですがどうしたらいいでしょうか。

③ 3歳の女の子ですが、いつもお友達のおもちゃを取ってケンカばかりしています。自分のおもちゃは絶対他人に貸さないのです、厳しく言うと、よけいに暴れて大変なんです。「しつけが悪い」と言われたりして、親同士の関係も気まづくなっています。どうしたらいいですか。など、実際にありがちなことをいくつか設定しました。

まず最初に各自が自分なりの回答を考えます。次に關心のある項目で集まって、グループを作ります。そしてそれぞれの役割に分かれてロールプレイをします。全員が交替でします。

「子どものおけいこ事なんです、近所の子どもさんがみんなピアノとか英会話とかやっているの、うちの子どもも習わせたいと思うのに、行きたがりません。どうしたらいいでしょうか」

「お母さんが習わせたい理由は、みんながやってるからなんですか？」

「それもありますけど、小さいうちに何でもさせておいた方がいいと思って……」

「そうですね。その何でもというのは例えばどんなことでですか？」

「最初に言ったようにピアノとか英会話とか」

「他にはありませんか？」

「バレエとかお習字……」

「何でもさせてやりたいということですが、おけいこ事以外にはさせてやることはありませんか？」

「……」

「親が何かをさせるといふよりも、お子さん自身が興味を持ってやることのできるようにしてみてもどうでしょうか。例えばお絵かきが好きなら、思う存分描けるようにしてやって、それでは足りないようだったら絵の先生をさがしてみるようにしてはどうでしょう」

質問項目以外のやりとりは、すべて学生が考えます。その会話の中に、自分自身が欲しかったことや、してもらって嬉しかったことが出てくることが多いようです。

やっっているうちに、学生の表情が柔らかくなってきます。そして、最後の感想で自分の子どもの頃の経験を語ってくれる学生がとてたくさんいました。

「ブロックとかパズルとか、親が与えてくれる知育おもちゃばかりで、それを一所懸命やって、気がつくくと友だちと遊ぶのがこわかった。今もそういうところがある。でも一人でばかりいると、友だちと遊べと言われて、仕方なく外で一人で過ごした」

「父親が恐くて、仕事から帰ってくると、いつも部屋の陰に隠れていた。今でも物の陰にいと安心するところがある」

「いつも親が何でも準備してくれていた。おけいこ事も言われるとおりにやった。それはそれでいいけど、今でも自分が何をしたいかわからないで、友だちに決めてもらっている。こんなので大丈夫かなあと思うことはある」

自分の育ってきた環境を省みて、だからダメなんだというのではなく、そこからの出発をめざせたらいいなあと思います。自分を好きになることから始めて、次の世代の子どもたちのことも好きになれたらいいですね。

私は、これまで保育というと、女と男が共に担うということを中心にしてきましたが、その前にやるべきことがあったのだなあと振り返っているとこです。

(かがわ・きょうこ 広島県／中学校・専門学校非常勤講師)

見本紙 お届けします。お問い合わせ下さい。

草の根は

伸びつづける。



世の中に？も
もち始めた。
男たちにも。

新聞代	(送料込)
1ヶ月	750円
3ヶ月	2,250円
6ヶ月	4,500円
1年	9,000円

毎月・5日・15日・25日発行

女たちの情報紙

ふえみん
f e m ♀ n

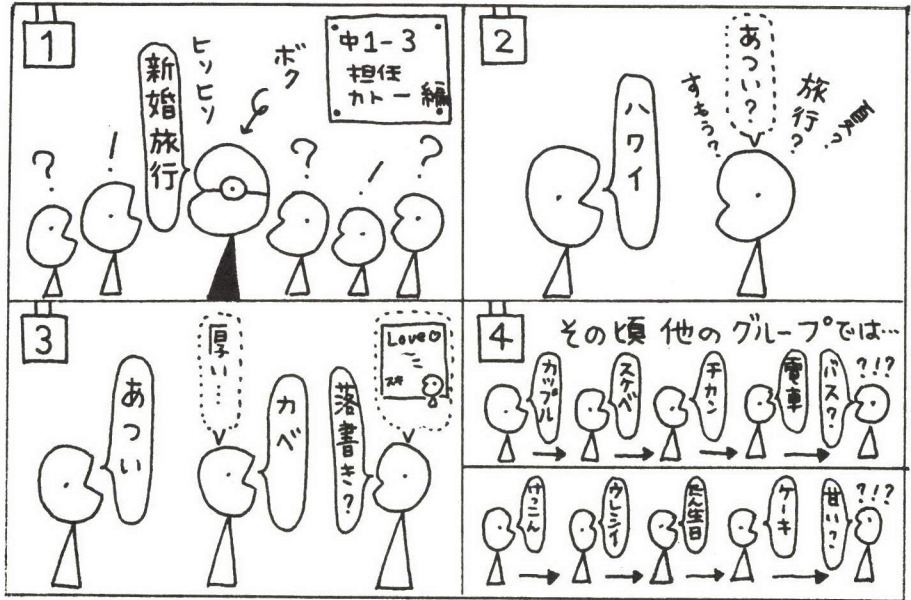
婦 人 民 主 新 聞
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

からだのしんばいは
はたらくもんだい
こころのえいよう
さべつへのいかり
アジアのつぎぎ
あんぜんてなに？
きのうまでのみち
あしたへのみち
わたしのいけん
あなたのいけん
おんなという
ちから。

創立以来、無党派の立場で50年。
女の視点で創る、もうひとつのメディア。

東京都渋谷区神宮前3-31-18-301 大阪府 大阪市北区中崎西3-1-5
TEL 03(3402)3244.3238 TEL 06(371)2429
FAX 03(3401)3453

ふえみん 婦人民主新聞
婦人民主クラブ責任編集



by Katoh

(用意するもの)

とくにありませんが、僕は優勝チームへのプレゼントを用意しました。

(やり方) ※6列対抗でやりました。

- ① まず列の1番前の人だけを集め、進行役がある言葉(例、公園・お化け屋敷・ドラエもんなど)を言う。
- ② 「ヨーイスタート」で、1番前の人、その言葉から連想する言葉を次の人に伝える。列の最後の人まで、同じことのくり返し。
- ③ 列の最後の人、進行役(ボク)のところまで自分が連想した言葉を言いにくる。
- ④ 言いにくた順(6列あったら6点→1点)にグループごとに点数をつけていき、もし正解があったらさらにそのグループに5点プラスする。
- ◎ 3~5回くらいやったところで、1番点数の高かったグループの勝ちとする。各回ごとに「珍答」のあったグループの人たちに、順番に、どういう連想をしていったのかを言ってもらおうと、このゲーム、2倍楽しめます。

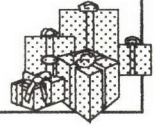
*出典 「教室の定番ゲーム」(18~20ページ参照/仮説社/1280円)

◎このコーナーでは、家庭科の授業や学活などでスグに誰もがマネできそうな皆さんからの「掘り出し物」(教材や教具、本、ビデオなど)をお待ちしています。使い方などを添えて、『楽市楽座』編集局:加藤昭仁までお便り下さい。(〒357埼玉県飯能市美杉台5-27-6, A-201 FAX 0429-71-0869)



楽市楽座

加藤昭仁



〈連想ゲーム〉

この春から、先月号でご紹介した〈ソーセージづくり〉に登場してくれた子どもたち（父母たち）の、ナント担任になりました。

初の中1、初の担任に、ちょっぴり戸惑いながらも、しっかり者の子どもたち（父母たち）に助けられながら、今のところ毎日たのしく担任やっています。

でも唯一困っちゃうのが、毎週あるH・Rです。行事の前や、クラスで決め事（席替えなど）がある時はいいのだけれど、それ以外の時って、正直ボク、何やったらいいのかわからないのです。

そこで、とくにやる事がない時には、今回ご紹介するような、クラスのみならずすぐに楽しめるゲームをちょこちょこやり始めています。

「連想ゲーム」は名前の通り、最初に進行役（ボク）の出したある1つの言葉から連想する言葉を、グループごとに次々伝達していき、最後の人の連想した言葉が、最初に進行役の出した言葉と一致すればOKという単純なものです。

でも、ゲームが始まると、中1の子どもたち、「早く早く〜!」「えっ、何それ?」なんて大騒ぎしながら、あっという間に3回勝負は終わってしまいました。

ゲームの勝敗もさることながら、途中どういう連想をしていったかを、特に「珍答」してくれたグループの人たちに、前の人から順番に言っていてもらおうと、これが大いに盛り上がるのです。

同じ言葉を聞いても、その言葉からイメージするものの違いや、発想の仕方の違いに、子どもたち、大笑いしながらも、お互い驚いたり感心したり。

遊びの中に見え隠れする、友だちの「個性」に、子どもたち、ゲームの勝敗以上の関心があったようです。

「たかがゲーム。されどゲーム」。う〜ん、普段の授業の中でも、こんなシーンを創っていけるとい〜んだけどなあ。

(かとう・あきひと 私立中・高校家庭科教諭)

おんなが

歳をとるといふこと

木村栄



ついに来た。もう大ショック！そりゃあいつかは来ると思っていたけど、まさか昨日今日とは思わざりしを、だわよ。私まだ一応五十代なんだから。前の座席にちよつと詰めれば座れそうな半端な隙間があつて、その真前に立っていたの、もの欲しげにジロジロ見ながらね。そしたら、後ろから肩を叩かれて「座って下さい」って。一瞬何のことかわからなかった。「お年

寄りに席を譲りましょう」だと気づいた時の何とも言えない気分、わかる？相手に恥をかかせちゃいけないと思つて、お礼を言つて座つたけど……。

後で息子に、譲るべきか譲らざるべきか年齢の判断がつかなくて困る時があるって聞いて、そんなものかと思つたけど、そう言えば最近また白髪が増えたなあとか、意識していないとつい背中が丸くなるしとか、考えちゃつた。

初めておばさんと呼ばれたの、あれはいつだったかしら。発車間際の地下鉄に飛び込んで、「おばさん、危ないよ」って若い男に言われて、私のことだと思わなくて知らん顔してたけど、あれ、確かに私のことだった。

最後に街で「お茶飲みませんか」って声かけられたのはいつだったっけ。渋谷の雑踏で、よく聞こえなくて「え、何ですか」と二度も聞き返した。時間を聞かれたのかと思つたのよ。苦笑して、そのくせわざわざ「子どもが

待ってるから」なんて言つたりして。

忘れっぽいのに、なんでこんなつまらないことばかり覚えてるのかつて？

つまりこれが老いを刻む目盛り、確実に年を取つたことを意識させられる通過儀礼になつてゐるつてことなのかなあ。

負け惜しみを言うわけじゃないけど、通過儀礼をひとつ通り抜ける度に別の世界が開けてくるのも事実なの。うまく言えないけど、人からどう見られようと私は私つて感じ。いろんな囚われやこだわりや、自分を縛つていたものから急に自由になつて、好きなようにすればいいんだつて気になる。軽やかで風通しがよくて、悪くない気分よ。

でもこれつて、もしかして、年をとると羞恥心がなくなつて図々しくなるつて言われていることなのかしら。

(きむら・さかえ/ライター)



今回は染料(草や木)の採集について書きましょう。店に売っていないものを手に入れるためには、いろいろと気をつけて周りを見なければなりません。

まず、その一つは、空き地。葛やいぬで、せいたかむらさし犬蓼、背高泡立草……。草は、夏、よく茂つてから染めると良いものが多いから、今、何が、どこに、どのくらい育っているかを、散歩したりしてチェック。天気を調べて「明日、染めよう」と決めたら、目覚ましをかけて、翌朝

はさみを持って涼しいうちに、いざ採集へ。まれに役所の草刈りに先を越されて、「やられた!」と叫んでがっかり帰って来ることもあるけれど……。

次によく見るべきはゴミの集積場。時々、庭木を剪定した枝が出してあるからなのです。家の窓からゴミの集積場のチェックを怠らず……。束を見つけたら、自分のゴミを出しつつ、何の枝かを確認し、新しく、虫がついていなくて、特に枇杷や月桂樹なら必ず持ち帰ります。可能ならすぐ染め始めるし、予定が入っていたら、バケツに水を入れてさしておいて、できるだけ早く染めちゃう。

枇杷の赤茶色は、他にあまり出ないので貴重なのです。今年はもう二回、枇杷の枝を持ち帰って染めました。(四月号で紹介した桜と同様に)枝はできるだけ細かく折って、ひたひたに水を入れて煮ます。グツグツ沸騰させて三分。これを水を替えて三回、染液を採ります。冬の方が赤味が強いといわれています。

いますが、家のあたりでは、早春、花の咲いたあとに剪定された枝が出るころが多いのです。

そしてもう一つは、我が家の小さな庭。金木犀、楓、梅、南天、山吹、紫陽花、花水木、小手毬、美容柳、馬酔木、箱根空木、熊笹、沙羅……。木はほとんど一本ずつ。それでも剪定すると量はけっこう出るので、毎年、さまざまな色が楽しめます。それから、種を播いたり、苗を買って育てた、ペパーミント、レモンバーム、ローズマリー、バラ、ピラカンサ……。(茜や藍は専門店で購入します)。

毎朝飲む紅茶の葉も、玉葱や栗の皮も染料になります。採集の方法はいろいろ。染料まかせの草木染めです。

*六月五〜七日、箱根の仙石原にある「ウエルテル俄石」(Tel: 0460-43351)で作品展をします。よかったらのぞいてみてください。

(よしむら・みか/染織家)

シネマの魔

武田秀夫

「デカローグ1 あなたは私の他になにものをも神としてはならない。」

字幕が消え、深沈とした音楽が鳴り、氷結しかけた川の面をカメラが滑るように行く。と、雪におおわれた対岸に焚火があり、厚い外套の衿を立てた男が一人、その火をみつめて座っている。男はわずかに目を動かし、それからその目を戻してひたとこちらをみつめる。まるで見ている者の心の内をのぞくように。あるいは、見ている者の心に怖るべき問いを問いかけるように。無言で。

昨年の秋、クシシュトフ・キエシロフスキ『デカローグ』(一九八八年 ポーランド映画)の第一話「ある運命に関する物語」をビデオで見たのがきっかけとなって、あっといいう間に十時間にわたるその連作(全十話)を見てしまったのだが、何がそれほど多くの心をとらえたのか、まるで一つ

● 『デカローグ 第一話』 ある運命に関する物語』について

の事件が起きたかのような感じだ。

その後、反芻するように何話かはくりかえして見た。キエシロフスキの他の作品「ふたりのペロニカ」を見直し、「トリコロール／白の愛」「同／青の愛」「同／赤の愛」をはじめで見ることもした。にもかかわらず、『デカローグ』の何がそれほど自分をひきつけたのか、なおもよくわからないまま、いちいちレンタルで見るのがめんどうになってとうとう全十話を収めたビデオ全五巻を大枚はたいて注文するという、我ながら愚かしい挙にまで出ってしまったのだ。もうこうなってはしかたがない。この偏愛の根拠を、根拠の有りや無しやもふくめてさぐらねばやまずといった気持ちにおちいつてしまった。

ところで、ぼくは今、さる公民館の依頼に応じて「映画と討論・〈少年〉について」という講座の企画を練ってい

るのだが、七月の土曜日四回という粋なので、『テルレスの青春』（フォルカー・シュレンドルフ 一九六六年 ドイツ映画）『牯嶺街少年殺人事件（四時間版）』（楊徳昌 一九九一年 台湾映画）『ケース』（ケン・ローチ 一九六九年 イギリス映画）の三本を決め、四本目として、自分には不可解なところのずいぶんあるこの『デカローグ 第一話』および『第五話 ある殺人に関する物語』を思い切って参加者の前に提出し、一緒に考え合いたいと思っているところなのである。

中学校の教師をやめたころからだろうか、世の中の出来事に対してどういうわけかすぐに反応することのできない鈍い人間に変わってしまった自分としてはめずらしく、昨年の神戸の事件、それにつづいて起きた黒磯の女教師刺殺事件には激しく心を揺さぶられ、いろいろと書いたり考えたりしながらなおもよくわからないまま、少年を主人公とした映画の傑作をビデオで見るといった方法を杖と頼ることもしながら少しでも考えることをつづけたかと思っているのだが、その時、『デカローグ』という作品が内包している何か静かに自分の思念をさそっているという感触だけはたしかにあつて、その感触だけを頼りに思い切つてそれをとりあげさせてもらおうと思つているのだ。

さて、ともう一度座り直してはくは手さぐりを始める。

冒頭の男はそれ以後少しも変わらぬ姿で二度三度と画面に登場しながら、堅く凍つていたはずの氷が割れて少年が溺死するという悲劇の進み行きに一切関わることはない。厳しい寒さの中、焚火のほかに暖をとる術をもたない放浪者なのか、男は無言のまま雪の川岸に座りつづけて、焚火の前にその青い目をわずかに動かしあるいはこちらをみつめつづけるだけなのだが、その焚火の男は、『デカローグ』が不可思議な力で自分をひきつけ、しかもその作品の何がそれほどまでに自分をひきつけたのかがわからない、そのわからなさの核心を象徴するものとしてほくの前に座りつづけているかのようなのだ。

そのおきな

をとりをそなへ

草明き

北上ぎしにひとりすわれり

大正三年四月、賢治十八歳の短歌だが、賢治によつてみつけられているその（おきな）が孕む一種の気配のようなものが、性質は異にしながらも、『デカローグ』のその男にはある。

北上川の岸边に媒鳥おとりをそなえて小鳥を待つ鳥刺しの姿は当時ありふれたものだったろう。しかしそれがいったん賢

治によってみつめられてそのような歌に形象化されたとき、その老いた鳥刺しは、まるで人生の岸辺で罪なき小鳥を捕えてこれを鷲^{じゆ}ぎつつ生を送る男、殺生を業として生きるほかに術のない人間という生き物そのものといった、哀切な気配をただよわす人物に変貌する――。

ほくは大げさなことを言っているのだろうか。なるほど若き賢治は単に触目の光景を無意識に歌ったにすぎず、そんなしやらくさい意味づけを寄せつけないような無心さで歌ったにすぎないだろう。だが彼に生得の見る力、対象へと浸透してそのままさらにそのむこうへとつきぬけてその先にあるものを見てしまう凝視の力にはただならぬものがあり、この場合も賢治は少年の頃にみつめ歌のかたちで形象化した鳥刺しのイメージを心の中に抱きつづけ、やがてそれを銀河鉄道の夜の車内に滑稽にして哀切な（鳥を捕る人）として登場させることになるのだが、キエシロフスキの〈焚火の男〉も、旧約の世界から抜け出してきたようなただならぬ気配を漂わせて雪の川岸に座りつづけ、少年の溺死にいたる悲劇の一部始終をみつめつづけるのだ。

旧約の世界と言ったが、勘で言ってみただけでほんとうのところはよくわからない。しかし、この〈焚火の男〉のイメージには、そういう生煮えのことばであろうとも何かを与えずにはいられないような気配がたしかにあり、しか

も風土を異にするべくにはそうしたイメージをキエシロフスキがどこから汲み上げたのかよくわからないのである。

音楽がつづく。すると、ひたとこちらをみつめていると思われた男の視線の先を、その男にみつめられるようにして女が一人、魂を抜かれた者のように夜の街を行く（女は、溺死した少年の叔母で、母がわりにいつくしんできた少年の遺体がいま氷の割れ目から引き上げられるのを目撃したばかりなのである）。

どうやら女は今ひとつのものをみつめ、それにたぐり寄せられるように歩いているらしい。その目は暗い街のあかりをかすかに映して涙ぐんでいるように見える。

女が立ち止まる。その視線の先には通りにむけて据えられたテレビの青い画面があり、十人ほどの子供がその中をこちらにむかつて駆けてくる。その先頭を一人の少年が明るい笑顔で走り、画面のこちらへ消えようとする。その大写し。少年はその日、学校にインタヴューに訪れたテレビ局の指示にしたがって嬉々とカメラに向かって走ってみせたのだが、その午後には、父から贈られたクリスマスプレゼントのスケート靴をはいたまま氷の底に沈んだのだ。

遺体の引き上げられるのを見たばかりの甥のパヴェウが今笑いながらこの自分にむかつて駆けてくる！パヴェウと

自分は、雪の原で、なにかといえは駆けつっこをしたのに、そのパヴェウは今——。

凝然と立ち尽くす女の左の目に涙がにじみ、やがてそれは頬を伝って流れる。

と、再び川岸の焚火を前にした男。煙がしみるのか、それとともにじむ涙か、パヴェウの叔母の涙があふれたと同じ左の目を、男は指でぬぐう——。

となると、こういうことが。

冒頭焚火の前にひたとこちらをみつめた男の青い目、その視線は、夜の街を行く叔母をさしつらぬきバトンタッチされてその叔母の視線となつてテレビの青い画面に大写しとなつた少年の笑顔にたどりつき、その少年の笑顔にと胸をつかれて涙ぐんだ叔母の涙は視線の来た道をもどつて川岸に座る男の目に涙をもたらしした——。

となると、氷結した水辺で焚火をたくその男は、進行する悲劇に全く関わることなくひたすら座りつづけるだけのようでありながら、その凝視の力によつて悲劇を見守り、支え、動かすそうした存在——神のような存在——の象徴ということになるのだろうか。

絶対的に関わることなく、そのことがそのまま絶対的な関わりとなるそうした存在。少年パヴェウは、「お前の体重の三倍以上を支えることができるくらいの水の厚さにな

るはずだ」という父の言葉を信じてスケートをたのしんだのに思いがけずその氷が割れた、その悲劇をじつと見守る非情な目とその目に浮かぶ涙と。その絶対の矛盾が一つのものでありうるそうした存在。

堅く凍った氷を信頼して無心にスケートをたのしむ少年。その水辺で火を焚きながら座りつづけみつめつづける男。慄えるほど怖くなつてくる。

音楽はなおもつづき、ちょうど冒頭のシーンにおいてカメラが氷結しかけた川の面を滑つて行ったように、コンクリートに小石を装飾的に埋め込んだ細い歩道を今度もカメラが滑つて行く——と思う間に、歩道と思われたそれが鳥の鋭い羽音とともに空にむかつて屹立し垂直な壁となつて、カメラは高層住宅を下から仰ぐ。数羽の鳩が飛び立ち、はじめて冒頭からの音楽が鳴り止む。

窓の一つに鳩がとまり、くぐもつた声で鳴く。それに誘われたように一人の少年が窓硝子の向こうに現われる。鳩が首をかしげて少年をみつめる。少年も首をかしげて鳩をみつめる。その口もとに泛ぶ美しい微笑。パヴェウだ。映画は悲劇を回想し始める。(つづく)

(たけだ・ひでお／霞塾主宰)

のき のき 〇んぼ

あま 良 高



小学校五年生の時だったと思う。その頃、『伝書鳩』にこっていた。鳩を飼って、遠い所からいっせいに鳩を飛ばしてゴールまで着順を競うレースである。『おっさん』（著者）は、『伝書鳩』といっても、ただ鳩を飼って、飛ばして帰ってくるのを待つだけであった。

当時、鳩を飼うのが流行っていた。『おっさん』もすぐとびついて、とにかく鳩が欲しくて欲しくてたまらなかつた。鳩を飼っている中学生を見つけて鳩をもらいに行つた。当時、流行っていたとはいへ、不思議と近所で飼っている子はいなかつた。4キロほど離れているところにこうちゃんという鳩をたくさん飼っている中学生がいた。こうちゃんの家を訪ねて「鳩を飼いたいので分けて欲しい」と言つたら、こうちゃんは、気前よく二羽のつがい（夫婦のこと）をくれた。鳩の色は、雄が「灰ごま」で雌が「白の混ざり」であつた。当時鳩の呼び名はいろいろあり、「灰」「灰ごま」「栗」「栗ごま」「黒」「黒ごま」「白」などと呼んでいた。自転車の荷台にダンボール箱をくりつけ、その中にもらつた鳩を入れて家に帰つた。

鳩小屋は、父親が役所で廃棄備品になつた書棚をもらつてきたものを改造した。網を張つて、タラップを付けて、鳩の出入りする板の台をつけて完成した。何ともぶさいくな小屋だったが、一応鳩小屋である。

『おっさん』はうれしくて、毎朝餌をやり、水をやり、赤土をやり、学校が引けると飛んで帰って鳩小屋へ急いだ。

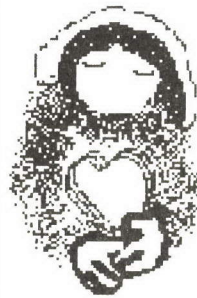
『おっさん』は、早く鳩を飛ばしてやりた

いと思ひ、がまんしきれずに一週間目には外に放つてしまった。すると二匹の鳩は、山あいを飛んで旋回してはるか彼方に行つてしまった。普通二、三時間もすれば小屋に帰つて来るのである。ところが、夕方になつても帰つて来ない。『おっさん』は、青ざめてしまった。何度小屋に見に行つてもいない。思ひ余つてこうちゃんに電話してみると、「鳩帰つとるで！ あほやなあ、もう飛ばしたんかないな。慣れるまで二十日間ほどは飛ばしたらあかんで！」と言われ、次の日学校が引けてから迎えに行つた。「かんにんな」と言つと「初めは、誰かてせや」と妙にやさしかった。

それから、毎日しっかり鳩の世話をした。朝夕の餌やり。赤土・水の補給・糞掃除。いくらでも仕事があつた。鳩の餌は、小麦・こごめを与えていたが、この二種類ばかりだと便秘になると聞いたので、20キロ離れた町のベットショップに買いに出かけた。その店の餌は、とうもろこし・稗・粟・小麦・こごめなどがミックスされていた。赤土は、鉄分とカルシウムを摂るのに必要だつた。糞を毎日掃除してゐて、便秘か下痢かがわかり、鳩の餌をいろいろ工夫してみた。また、卵を産んだ時の事を考えて巢を作らねばならなかつた。鳩が卵を温めるための巢である。石膏で作つた深い鉢皿である。さらに、鳩に、早く卵を産ませるために「擬卵」(プラスチックで作つたにせの卵)を仕入れた。毎日鳩を観察してゐて、驚いたのが、鳩の盛り々である。雄がグルグルと声を出し、首を上下に縮めたり伸ばしたりして雌をおいかけまわす。雄が雌の上にとりたり絡んだりするのである。そして交尾というものを知つたのである。こうちゃんの言つたとおり二十日間がまんして鳩を放つた。家の回りをゆつくり飛び始めて、だんだんスピードをあげて山合いを旋回し始めた。自転車で追いかけた。やがて山の向こうに姿が見えなくなつてしまった。『おっさん』は、はたして帰つて来るかどうか心配して待つていた。数時間経つてからグルグル グーグーの聲が聞こえてきて、走つて、鳩小屋へ行つてみると、何と鳩小屋に二羽が帰つていた。

『おっさん』は、狂喜して叫んだ！「やつた！ やつと俺の鳩になつた……」。 (次号に続く)

● 変な子じゃないよね 滝野澤直子



神戸の病院では、よく出前でキムチチャーハンを食べた。病院のご飯もおいしかったけど、何か街の匂いのある楽しいものが食べたかったんだ。

一年間付き添ってくれた母が青森に帰り、転院したその病院で私は一人でリハビリを続けていた。そう言うのと寂しそうに聞こえるけれど、なんのなんの。病室は四人部屋、しかも体は動かないが口だけはすこぶる達者な女が四人、二十四時間いつも一緒に、お菓子ポリポリ、看護婦のうわさ話に花を咲かせ、消灯すぎても暗闇でドラマの続きを見ながらヒソヒソ、みんなそれなりに年はくっついていても女子大の寮みたいじゃなかった。

自分たちは明るい部屋だと気に入っていたけれど、しょっちゅうニンニク臭がプンプンしている部屋が、看護婦に好かれるはずがない。ましてこの部屋は、手もうまく使えない、立って歩くこともできない重度の障害者ばかり。うんちも、おしっこも、お風呂も、車椅子に乗るのも自力ではできない、とにかく手の掛かる部屋だった。物を落としたり拾えないし、近くでも取れない物が多い。次に誰か来たらあれもこれもしてもらわなくちゃと、こっちが待っていれば待っているほど、看護婦の足は自然と遠のいていった。

キムチチャーハンはおいしかったけれど、食べたあとでプラスチックの使い捨て容器がゴミとなって残る。ごみ箱はすぐそばに見えているのに自分では捨てられない。以前、カップ麺の殻を看護婦に頼んだときには、「自分で後始末できない物は食べないでください」ってピシヤリ。あれはスープが残っていたのがマズかったんだらうな。まあ、容器をごみ箱に捨てるくらいなら嫌味も言われまい。そうは思っても看護点数の取れない雑用を看護婦に頼むときにはいつもドギマギした。

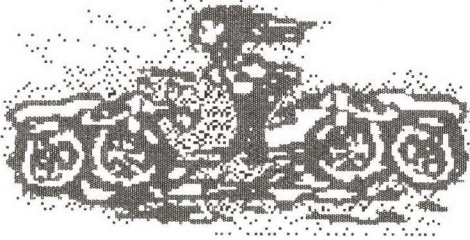
そうまでして出前を食べなければやってられないほど、入院生活はストレスに満ちていた。風呂は週に一回。週の途中でシャンプーを一回。風呂とシャンプーの間が五日もあくこともあって、髪はいつもベタベタしていた。ベッドから車椅子に降りていられるのは、看護婦の多い日勤帯だけ。日も暮れない四時半がベッドに上がる時間で、あとは次の日のリハビリの時間まで電話もかけにいけなかった。うんちがふいに漏れてしまったときに、こちらがホッとするような笑顔で後始末してくれた看護婦は一人か二人しかいなかった。たとえ一人でも、ただけマシかも。私、けがをする前に自分が看護婦だったときには、患者さんの気持ちなんて全然わかんなかったもんな。私は若くて元気で楽しいこともいろいろあったから、患者さんの気持ちなんかわからなくても何も困らなかつたんだ。

そんな毎日でもまだまだ退院するわけにはいかない事情が部屋の患者のそれぞれにあった。帰る家のない人、家に帰って家族に介護の負担をかけたくない人、リハビリでもっと頑張ればもう少しできることが増えるんじゃないかと焦っていた私。でも入退院の回転をよくしたい病院側は、部長回診のたびに退院の時期をせっついて帰っていた。回診が終わると誰からともなく、「なんか、おいしいもの食べようよ」

自分が障害があつて人の世話にならないといけないから、したいことができなくても当たり前だともすればあきらめそうになるのがイヤだった。「チャーハンのパックを捨てて」という他愛ないお願いすら怖くてできなくなつたら、おしまいだと思つた。

(たきのさわ・なおこ)

葛森樹の巡業日記



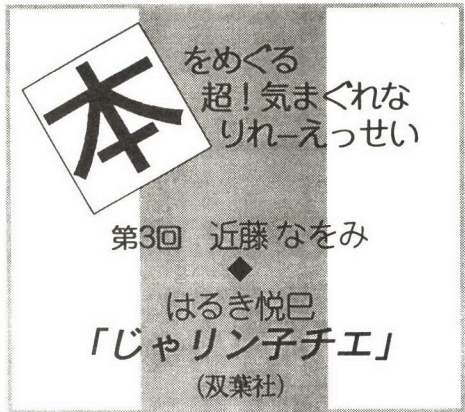
先月は声帯の手術後の安静のために無言で過ごした。電話もかけなかったし、受けることもしなかった。ただ黙々と飛行機や新幹線で頻繁に移動して術後の抜糸や発声のリハビリを受けた。コンピュータで声を解析し、術後の声帯が一番きれいに振動している270ヘルツを新しい地声の周波数にする訓練だ。以前より150ヘルツは高い。これは民放の女性アナウンサーの声の高さに近い（NHKは220ヘルツで抑えている）というから、緊張する。最初は自分がブリッ娘しているように照れた。次には声と一緒に体もクネクネしてしまい、女友達から一斉に白い目を向けられた。ところがタクシーの運転手さんはみな親切になってしまった。頼まないのにトランクの積み降しをしてくれる。いままで一度だつてしてもらったことがなかったので、狐につままれたようだ。このクネクネはすぐに治したが、声のジェンダーの力をまざまざと感じた最初の出来事だった。

今改めて思っていることは、ジェンダー

フリーって何だろう、ということだ。私の理解するジェンダーフリーとは、男／女に二分化した身体の再構築の自由や生き方の質の選択も含んだ、個の在り方の問題だ。だが、運動体や啓発事業の標語に使われる「ジェンダーフリー」はなぜか「性役割からの解放」止りが多い。「男らしさ」「女らしさ」を押しつけるのはおかしいというのがいくら正しいメッセージでも、所詮「あれは良い／これは悪い」というお墨付きの道徳律の枠内からの判断にすぎない。別の形での制限を引き受けることになって、制限からの解放とは正反対だ。でも、それに満足している人なら、自由ではなく、新しい社会秩序が欲しいのが本音かもしれない。それを「解放」と言っではいけないと思う。「解放」がかわいそうだ。

そもそも個人の多様性を秩序的に考えている自分を疑わない人が多すぎる。多様性とは、デタラメが当たり前という実にあっさりした認識なのだ。

（つたもり・たつる／作家）



「じゃリン子チエ」の連載が終わり、おばさんも楽しめるコミックが、またひとつ消えてしまいました。主人公の父親、竹本テツは、人並み以上の頑健な肉体を持ちながら「まっとうに働いて家族を養う」とか、「社会を支える人間として活動する」なんぞといった考えはカケラも持ち合わせない男。自分の欲望に忠実、他人の利益は自分のためにあるもの、という理念のもとに、

ヤクザ限定のケンカと公営ギャンブル以外の賭（主にカブ）に生きがいを求め、喜びを見い出すといった「しょうもない」男。

こんな生産性のない父親をもったチエちゃんも、小学五年生という身でありながら家業のホルモン焼屋を一人で（もちろん仕入等の裏方として祖父母の協力があるわけですが）きりもりするという、児童福祉法もへったくれもない世界。母親の家出、そして「母帰る」ものの、あいかわらず店の運営は彼女の小さな手に委ねられたまま、という何とも悲惨な（少なくとも現代の日本においては）状況が延々と続く……。

それでも彼女は、真つ白な歯をおてんとさんに向けて、カカカと笑うんです。この強さ！ このいじらしさ！ 正に、親はあつても子は育つのです。されど、単なる「根性物」や「人情話」のような色彩が感じられず、カラリと明るいのは何故なのでしょう。

いわゆる「酒と女」というものは受けつけないというテツのキャラクターが、まずポイントでしょうし、登場人物達が家族や友を思いやるが故に起こる事件と、それをきっかけに人間誰でも（もちろん子供も）持つ二面性がドーンとはじけた時の面白さ、などがあげられるように思います。二面性といえば、「憂鬱の気」を持って余す猫ジュニアと、そんな友を気遣いながらチエちゃんの用心棒を必死に勤める猫、小鉄の存在も、この世界を語る時に欠かせません。人間以上に機転をきかせて働く彼らがいなければ、いかに気丈なヒロインといえど、解決できなかつたであろう事件は多いのです。いつも笑って支え合い、波をのりきる彼ら。「キレる」寸前の方も、そうでない方も、一度彼らの世界をのぞいてみて下さい。あなたのまわりにいる助っ人の存在にあらためて気づくかも……。

（こんどうなをみ／はたらくペンギン）

わがままのススメ

河村 ふみ

自己表現を妨げる一番の敵は、「わがまま」はいけなことだという誤った認識と自分より相手を尊重してしまおうというこの2点につきるのではないかと思います。この2点は実はセットになっています。どうということかという点、自分を主張しない人は、相手の「わがまま」は許して、自分の「わがまま」は許してはいけません。まず、「わがまま」から考えていきましょう。

「わがまま」というのは「我がまま」、自分のありのままという意味ですから、これだけでは少しも悪いことにはなりません。「我がまま」を表現することと、それが何何でも通そうということとは違います。後者は明らかにそれをすれば人から嫌われてしまおうでしょう。

ところが、自己表現を躊躇する人は、「わがままを主張すること」イコール「わがままを通すこと」だと捉えてしまっています。この点をまずしっかり分けていきましょう。

自分が感じていること、思っていること、自分の意見、こうして欲しいという要求、これらを表現することは自

然なことです。自分が感じていることや意見を表明し、それを相手はどう受け取るかは相手の自由です。共感してくれるかもしれないし、共感してくれないかもしれない。自分がこうして欲しいと言うのも同じように、相手がそれに応えてくれるか、応えてくれないかはまた相手の自由です。

自己表現をしない人に、どうして「言ってみないのか」と問うと、たいてい「言ったって無駄だ」という答が返ってきます。「言ったって無駄だ」という言葉の裏には、相手が自分の気持ちを受け入れてくれなくては嫌だ、受け入れるべきだ、自分の要求に応えるべきだという思いがありはしないでしょうか。

つまり、相手を自分の思うようにしたいという心理が働いているのです。これを大げさに言うと、心理学用語では「支配性」と言います。自分より相手を尊重するようできて実は内心は逆なのです。

また、「言ったって無駄だ」と決めつけている点について、「どうして無駄だと思っの」と聞いてみると、「そうに決まっている」とか、「前にもそうだったから」という答が返ってくるのですが、前にもそうだったからといって今もこれからもそうだという確証はないのです。以前に要求した事柄と違うかもしれないし、全く同じだ

としても、その時相手が応えてくれなかったのには相手なりの事情があつて、それは今は変わつてゐるかもしれない。あるいは、「言い方」「頼み方」が適切でなかったのかもしれない。自分だけの思い込みから勝手に相手のことを「〜に違いない」と決めてかかるのは、だからある意味では、相手を信頼してゐない、相手に対して失礼だとも言えます。

私自身のことを話しましょう。子どもたちがまだ小さかった頃のことです。たまに夫と一緒に映画や食事に出かけようとするのですが、家を出る時には私はもうくたくたに疲れてしまうのです。なぜかという、留守中の段取りを整えるのに大忙しで、食事の後片づけやら洗濯やら子どもたちへの指示やらしながら自分の支度もしなくてはならず、片や夫はというと、自分だけの支度に悠々と時間をかけ、合間に私の所に来ては「あと、何分だよ」「あと、何分しかないよ、大丈夫なの」と急かすのです。私はただムカムカイライするばかりで、やつと家を出る頃にはひどく不機嫌になつてしまつていて、プブリプリ怒つてゐます。夫に対する怒りだけが膨らんでしまつていて、もう映画や食事など楽しめたものではありません。ところが、夫は私がなぜ不機嫌なのか分からない。

そういうパターンが重なつたあるとき、
「もう、イヤーツ！行くのヤメーツ！」
と、台所にへたりこんでしまつたのです。

「どうしたの？」

「どうしたのはいいでしよう。あなたはいいわよ。自分の支度だけに2時間もかけて。私は出かける前にやらずに早くいけなことがいっぱい、自分の支度なんかする暇がない。手伝いもしないで遅れる遅れるつて急かしてばかりいて！もうこんな思いままでして出かけたくない！」

とどなりちらしたのです。そうしたら、

「言つてくれればいいじゃないか。洗濯物を干せとか、食器を洗つて言つてくれればやるよ」

「そんなこと、言われなくなつてわかるでしょ！」

「わかんないよ。言つてくれなくちゃ」

こんなやりとりがあつて、それから私も少しずつ言うようになったのです。

私の思いこみは、初めから「頼んでも無駄だろう」とあきらめていたこと、「言われなくても気持ちがあれば察するべきだ」、自分が逆の立場だったら当然相手の窮状を察するのだから相手もそうして当然と決めつけていたことでした。そして、察してくれない相手に対して腹

を立てていたのです。

でも、人は自分とは違うのです。だから言わなければ伝わらないのです。このことが分かるまで私もずいぶん時を費やしました。

言ってみると案外やつてくれるものですし、やれないときは、「くだからやれない」とか、「今は気が向かないから後でやる」とか、「今日はやりたくない」とか憎いことに「わがまま」を言ってくるのです。

「やりたくない」と言われてしまつては仕方ないなどあきらめざるを得ません。しかし、相手がそうなら、こちらも「やりたくない」とわがままを言つてもいいわけです。お互いに対等なら相手に対して腹も立たない。「相手のわがままを」を認め、「自分のわがまま」を認めないから腹が立つのです。お互いに「わがまま」を表明して、じゃあどうしようかと次に具体策を話し合えばいいのです。

よく「あの人はかり一方的に話して（主張して）、私は何も言えなかった」という人がいますが、それはたいして自分の方が自粛したのであって、相手がこちらの口を封じたわけではないと思います。本当は言わなかった自分に責任があるのに、まるで相手に非があるように相手を恨んでいる人がいます。自分から話すことをしない

で、相手がちつとも聞いてくれないとグチをこぼす。何年前かにテレビドラマで「くれない族」というのがありましたけど、あれですね。

待つていないで自分から動くというのがATです。

それから、「やりたくない」などということが理由になるのかと疑問をもたれるかもしれませんが、立派な理由になるのです。ATの目的は自分が楽になるため、自分を守るため、自分を尊重するためでした。そのためには自分の気持ちを尊重することが基本です。気持ちはそれだけで立派な理由です。ATは自分の気持ちを表現することです。何か断るときに、いろいろと理由を並べ立てる人がいますが、それは言い訳、弁解にしか聞こえないことがあります。

何かに頼み事をしたときに、あれこれ断る理由を並べ立てられるより「ごめん、気が向かないんだ」とか、「気が乗らない」と言つてくれた方が爽やかな気持ちにするのは私だけでしょか。

誰もが納得する理由がなくては断れないとなると、ますます自己主張しづらくなってしまいます。また、なまじ理由をくつつけると、相手に言い負かされてしまうことになりかねません。たとえば、友だちから映画に誘われたとしましょう。以下、（ ）内は気持ちです。

「ねえ、明日暇？」

「うん、暇だけど……（明日は家でグータラしていたい）」

「じゃあ、『エイリアン4』観にいかない？」

「エイリアンねえ、ああいうの好きじゃないんだよね」

「じゃあ、何でもいいよ私は。あなたの観たいの言つて」となります。あるいは、

「明日は子ども達の遠足の付き添いで……（この理由は本当だから理由があつてよかったと思つている。が、それがなかったとしても行きたくない）」

翌日、雨が降つて遠足は中止。積極的な友だちは、

「雨で遠足中止でしょ？ 映画に行こうよ」とまた言つてくるかもしれません。

親戚に不幸があつたとか、ウソの理由をでっち上げる人がいますが、これは問題外ですね。その後の人間関係にひびが入りかねません。もう二度と会わない人ならそれもいいですが、私など小心者ですから、もしウソがばれたらどうしようといけい気が重くなってしまうのがオチです。

このように、理由や条件をあげると、反論される余地を残してしましますが、気持ちは絶対です。気持ちはその人独自のものであり誰も否定することができないからです。そこで、ATは、できるだけ気持ちを表現するよ

うにと奨めます。

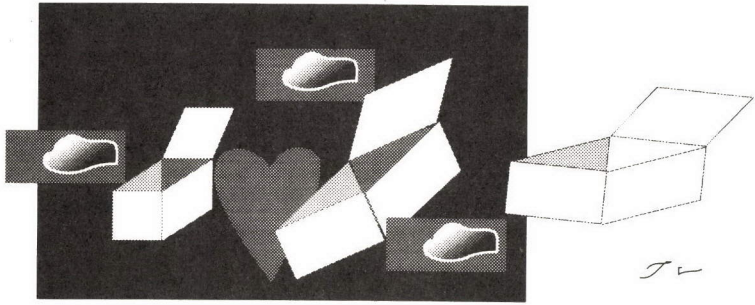
ところが、自己主張してこなかった人は、「あなたはどしたいの？」と聞かれても、その自分の気持ちが分からないという人が多いのです。他人の気持ちは優先しているといつの間にかそうなってしまうのですね。

そこで、そういう人には、役割劇で、「とりあえず相手に言いたいと思つたことを言つてみて下さい」と、促します。そして「言つてみてどうですか？」と聞いていきます。体の感じをたずねます。

自分の言いたいことが言えた時には体がすっきりするものなのです。何か思い出しかけてなかなか思い出せないとき、それが思い出せた瞬間、体の中で何かつかえていたものがすーと流れたという感じがあるでしょう。あの感じです。それがあつたときは気持ちと表現がぴったり合つたときなのです。

その体の感じが得られるまで表現を繰り返します。相手に言いたいことを言つたつもりなのに、まだすっきりしないものが残つているというときは、実はまだ言いたいことが言えてないときです。そういうときは、本当は何を言いたかつたのかな？ 気持ち、気持ちと自分の気持ちに焦点を当てて探つてみて下さい。

（かわむら・ふみ／フェミックス・カウんセラー）

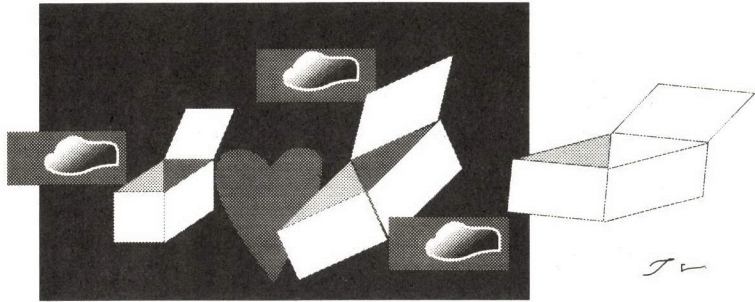


居場所考37 〈不透明な視界の前方に〉

水田幸子

今年はず年よりもまたいちだんと学生の就職活動が早まって、四年生は授業に出る暇もなく、四月から会社の説明会や、面接、試験などに駆け回っている。不況の深刻な今年は、女子学生にとってはことさら厳しい年だが、ここ数年、女子学生をめぐる状況は目立って変化してきているように思える。

十年ばかり前から、男性並みに仕事をした大学卒の女性のためにというので、いわゆる総合職というのが設けられ、ジャーナリズムでも話題になってきた。女性社員は総合職と一般職に分けられて、総合職の女性はもちろん、総合職をめざす女性は、男性社員と同じように営業セールスの第一線に出て、労働時間や労働条件を顧みず仕事をしなければならず、上司との付き合い、顧客の接待などを時間外にも積極的にこなすことを要求され、男性と同じ昇進競争に参加しなければならぬ。だが、一般職の女性は、お茶汲みやコピー、決まりきった計算事務や窓口業務など、何年たっても同じ繰り返しの仕事に、やりがいや生きがいを感じること難しくても、そのかわり熾烈な生存競争に身を置くことはないし、残業を断わってアフターファイブの自分の時間を楽しむことも、職場と家庭を両立させることも可能だ。というわけで、総合職が女性を男性と同じように会社人間にすることや、結婚や子育てとの

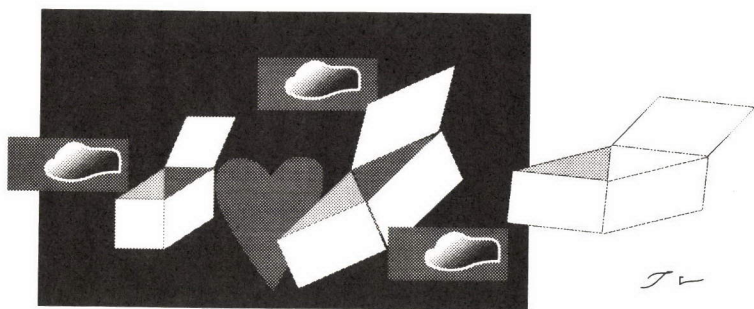


両立を難しくすることから、昔からの「平等か、保護か」論議に似た、聞き慣れた論争が女性たちの間で起きたのだった。

しかし、現在は明らかに状況が違ってきている。大学卒の女性を採用するとき、会社は今や総合職か一般職かなどとは問わない。男性並みに働かないような女性を、会社ははじめから採用しないのである。それでは高校卒や短大卒の女性はどうかといえば、これも同様である。ひと昔前まで、短大卒の女性たちは、結婚までの数年間を低賃金で働き、次々と交代してくれるOLの代表で、大学卒の女性よりよほど採用されやすかった。だが、多くの企業で人減らしが進んでいるこの頃では、短大卒だからといって採用されることはなくなったのである。

一九七〇年代の初めには、まだ就職希望は女子学生のマジヨリテイではなかったのが、七〇年代の後半から急速に就職志望者が増えはじめ、現在では就職を志望しない女子学生は皆無に近い。その中で、職場における差別待遇が女性の人生設計にとって大きな障害となっ
ていることが指摘されてきた。それを考えると、企業の側が女性を男性と区別せずと同じ条件で働くことを条件に採用するようになったという現象を、やっと女性が男性並みに仕事することを要求されるようになった、それだけ女性の職場進出が定着した、男女平等が進んだと、喜んでよいのだろうか。そうとは言えないのが実状だ。

すべての若い女性が働くようになり、女性もまた男性と同じように仕事をさせられているという現実が、彼女たちに仕事に生きがいを感じさせ、男性との競争に勝ち抜く意欲を燃やさせているか、仕事や職場に確かな居場所を見つけさせたかという点、そうではない。終身雇用のシステムが崩壊しはじめ、男たちが三十代でリストラの対象になっている時代に、女性たちが企業の中に自分の居場所を見つけていることの困難は、すぐ察しがつく。女たちは、むしろこれまで以上に、仕事や職場に安定した居場所を見出せなくなってしまったし、仕事に



アレ

本来的な自分の居場所を求めてよいのかどうかもわからなくなっているのではないだろうか。私が大学を卒業した当時、同級生のほとんどが就職しなかった。彼女たちが一様に「家事見習い」をするといい、それが習い事をふくめた「花嫁修業」であることに、親たちはもちろん、女性自身も社会も疑問を持たなかった。大学を卒業しても働かず、親の家においても、それは結婚前の女性にとつて、むしろ当然の、あるべき姿だった。女性にとつて家庭というのは、親の家庭であろうと、結婚して作ったものであろうと、「女の居場所」であることに疑いはなかったのである。だが、先日の朝日新聞の連載コラムで、夫を支え、夫に支えられていると信じて家庭を営んできた主婦が、昇進・昇格競争に身も心もすり減らしていく夫を見ていて、家庭を守ることに疑問を感じはじめ、働きに出ることを反対されたのをきっかけに、もう限界だと離婚した、というような記事を読んで、私は、女には家庭という居場所もなくなったことを痛感した。

私の世代なら、どこかで共感するものを感じないではないその主婦の話を、自分が男たちと同じようにシビアで、しかも明日が見えない職場という現実の中で働いて生きている若い女性たちは、どう思っただろうか。女性がかつてのように結婚までの何年間という人生の限られた一時期を働くというのではなく、男たちと同じように、三十代、四十代、五十代でも働きつづけなければならぬという条件が、ますます大きくなってきている。結婚しても共働き、出産、育児、家事と、女たちの負担は増えるばかりで、そこに明るい展望がない。仕事にも家庭にも自分の居場所を見出せないで、あるべき自分、こうありたい自分を求めて転々しながら眠れないような状況を、女性たちがこれから長期にわたってしのいでいかなければならないことは、現代の変容の中で女性が経験しなければならぬ、ひとつの必要な過程なのだろうか。

(みずた・のりこ／日米文学比較・フェミニズム文学批評)

京都 金森順子

私たちはこの二月に冊子、『家庭科の共修と共学を考えて10年』を編集発行いたしました。

これは、一九八六年（教育課程審議会が高校の家庭科男女共修を決定した年）から一九九六年（高校家庭科男女共修実施の二年後）までの十年間、家庭科の男女共修と共学を考え学びあう会を続けてきた、その記録です。内容は、その間に発行した文書の再現が中心ですが、半田たつ子さんから『家庭科の今日と明日』、森幸枝さんからは『振り返って』、とそれぞれに意義深い原稿を寄せて頂きました。巻末には『新しい家庭科We』最終号まで、『くらしと教育をつなぐWe』五十号までの特集テーマ一覧などを付録として載せています。

「家庭科の共修と共学を考える会」は、一九八六年七月、京都府長岡京市で府立高校の家庭科の現状を聴く集まりをきっかけに発足しました。それは、教育課程審議会が、高校家庭科4単位を男女共修・必修にすることを決定した直後です。家庭一般・生活一般・生活技術から1科目を選択する形が打ち出され、共修になっても男子向き・女子向きの家庭科に分けられるのではないかと、それでは困ると考えて呼びかけた集まりでした。

それを、「家庭科教育を考えるつどい」の第一回とし、続いて中学・小学校の状況を聞いたり、共同子育てを試みている女性たちとともに、原発と私たちの生活について考えたりと、一回一回立ち止まりながら回を重ね、十年間に二十回の「つどい」をもちました。また、次の案内のときに、前回の報告

を載せて、参加できなかつた人にも、家庭科をめぐる情報を届けるようにしました。一九八八年からは、案内・報告以外の記事も掲載して会報とし、「つうしん」と名付けました。一九九〇年から、購読希望者への有料発送を始め、その購読会員をこの会の会員としたのです（一九九六年当時の会員数約六十名）。

最初の集まりを企画した私たちは、その数年も前から家庭科の「女子のみ必修」は困ると考えていましたが、そこに至る問題意識は様々で、それらは微妙に重なりながらも、異なった視点と角度をもっていました。それから十年、自分とは違う家庭科への問題意識を少しずつ共有しつつ、自分が家庭科と向き合った原点での活動と両車輪の関係で活動を続けてきました。そこにこの会の特殊性があると考えます。

私たちは、「家庭科は、現実の社会や自然環境をよく見つめて、その上で自分はどうのように生きていくのか、どのような生活空間をつくらせていくのかを、生活の場を中心に、様々な角度から考えていく教科だ」と考えています。その視点から見ると、今の単位数、4単位では少ないのではないかと思いますが、最近、学校の完全週休二日制導入に関連して、そこから更に二単位減らすという声が聞こえてきます。

高校家庭科が男女共修・必修になったとはいえ、「家庭科」の問題はむしろこれからではないでしょうか。

そのような社会背景のもとで、いま私たちにできることは、一人でも多くの方に家庭科の様々を知っていただき、広く関心を寄せていただくことだと考えています。

その思いを伝えるために、この冊子を五百冊つくりました。高校家庭科男女共修実施前後の十年間、私たちがど

んな場をつくって、どのように学んできたかを、また、女たちが自分の生き方に筋を通そうとしたとき、その行く手を阻む「要」の部分に「家庭科」の「女子のみ必修」があったこと、「共修家庭科」の教科内容に大きな期待を寄せていることなどを読み取って下さい。冊子を介して「家庭科」のことを話題にしていただけじゃうれしく思います。(文責 金森順子)

『家庭科の共修と共学を考えて10年』

◆発行準備会

(金森 順子/菅原 充子/圓尾 豊子)

◆B5版 208ページ

◆頒価1000円

(送料1冊350円 10冊以上無料)

◆郵便振替 00990-6-114288 菅原充子

◆連絡先

金森順子 Tel 0774-33-3615

菅原充子 Tel /Fax 075-954-5986

Webバックナンバーのご案内

◆各号の特集内容や授業実践などのタイトル・著者名を明記したバックナンバーリストを作りました。ご購入の方は編集部までお問い合わせください。◆

◆Weのバックナンバーをお分けしています。お知合いへのプレゼントや資料として、またお手元に残っていない特集号をこの機会にぜひお買い求めください。◆いずれも1冊500円(ただし送料の負担をお願いします)。◆まとめてお買い求めの場合、10部以上9掛け、20部以上8掛けとなります。◆ご希望の方は、電話かファックス、あるいは郵便振替にて第〇号、〇冊と明記してお申し込みください。

◆TEL&FAX 03-3424-3603

◆E-mail femix@mail2.alpha-net.or.jp

◆郵便振替(00130-7-754314)

昨秋、兵庫のNさんからお葉書をいただいた。「次回フォーラムは岡山で開催されることになったので、日程を空けておいてほしい」と。その後、今度はIさんからお手紙をいただいた。「実行委員を引き受けてほしい」と。丁寧に断りしたものの、「会場を探すのを手伝ってほしい」というお電話をいただき、「それくらいのことなら」とお引き受けした。倉敷の「石山花壇」をご紹介して、やっと無罪放免……そうは問屋が卸さなかった。

らえておいでになった。飛んで火に入る冬の虫。お断りするつもりで行ったのに、引き受ける結果になってしまった。

■We夏季フォーラム' 98 in 岡山■

くらしと教育をつなぎ、
人と人、地域と地域をつなぐ
……そんな夏のフォーラムになるといいですね。

おいでんせえ 岡山へ

開催事務局◎市場恵子

一月半ば、初めての集まりを岡山でもった。兵庫からも会場の下見を兼ねて数人のメンバーが来岡して下さった。過去のフォーラムがどんな形で企画・運営されてきたのか、おおまかに説明を受けた。最終的にわかったのは、あまり予算はないので、講師はできれば地元で探し、遠くても自腹を切ってやってきてくれるような人をお願いしたいということ。全体会と子どもフォーラムは岡山で担当してほしいというようなことだった。

この日初めて集まった(集められた)地元メンバーは、何が何だかよくわからないうちから、初めて集まった。私自身も教員(社会心理学)ではあるが家庭科専攻ではないし、仲間もほとんどがW eの存在すら知らず、フォーラム未経験者ばかり。とはいえ、ここまで来たらやるつきやない。こうして、とびつきりファジーな実行委員会が出た。

最近、お知らせのチラシを見て、近隣の読者から少数ながら反応があった。これは文句なしにうれしい。まだ会ったことのない人々と友だちになれそうな予感に、少しウキウキしてきた。くらしと教育をつなぎ、人と人、地域と地域をつなぐ……そんな夏のフォーラムになるといいですね。

◆先日、在宅障害者を支援する地域コーディネーターの方のお話を聞く機会がありました。「障害者」と一括りにされることの違和感を、女・男・高齢者（若者）という言葉で一括りにされることを引き合いに話してくれて、なんとなく分かったような気になりました。私は母親。でも「母親だから～だろう」と思われて変な感じがすることがあります。「主婦なんだから～」なんて台詞には結構カチンとくるものがあります（特に夫からは）。やっぱ一括りはいけません。（山下）

◆このWeはQuarkXPressというApple MacintoshのDTPソフトでつくっているのですが、今月もまた入稿間近という段になってトラブル発生。私にとってマックはブラックボックス、まったくもって修行が及びません。今回もフェミックスのコンピューメンター/救世主（と勝手に呼ばせていただいている）読者の西川正さんに助けていただきました。感謝感謝です。梅雨ってもう始まっているんでしょうか。私って湿気に弱いんですね（暑さにも、寒さにも、ついでにマックにも……）。（中村）

◆天候不順のせいから「老人力」強化に向けて私の脳細胞のリストラがはかどっている様子。会話の不成立などは困ったことのようにはあるが、話が思わぬ重層性を帯びたり、面白かったりとどこにでも効用はあるものだ。それに物忘れがひどくなろうが私は口承文化の伝承者ではないしと思うと気楽である。しかし不思議なことに、悪態をつくというような状況では的確な言葉の選択力が働き、脳内が冴え渡るという快い感覚があるのはどうしたことだろう。（吉田）

◆道下さんのインタビューの中に、自尊心とプライドは違うという話が出て来て、プライドは傷つくけど自尊心は傷つかないと。ああ、そうだよと深く納得した。お遊びの心理テストで一人しか生き残れないとしたら、馬、羊、孔雀、虎のうちどれを連れていくかというのがあるが、私は虎を選ぶのだけど、これはプライドだと解釈している。誇りや矜持の意味で。自尊心から出発するのは確かだが、傷つくことによって傷つかない自分を育てて来た部分もあるから、プライドも捨て難い。（河村）

◆風が吹けば桶屋が、ではありませんが、無条件の愛が注がれれば自尊心が育ち、自己受容度が高ければ、きちんと自己表現（主張）できるからストレスがたまらずキレない、ということになるのでしょうか。「無条件の愛を」というと至難の業のように聞こえますが、要するに「あんたは面白い子だね」って愉しんで見ていられることだと解釈しています。（「いい子ね」とほめれば、親の期待にこたえてしまいますが）。前近代社会は「十人一色」、近代市民社会は「十人十色」、ポストモダン社会は「一人十色」という分類（見田宗介）が面白いと思う私ですが、多様性の尊重（十人十色）ができていない日本は、前近代社会？ その場その場で言うことが変わり、いつも同時に正反対のことを言いたくなる私はどうやら「一人十色」が性に合っているようです。（稲邑） ●前号の木村栄さんのエッセイの中で、月刊『ちくま』を『月間ちくま』と誤って表記してしまいました。お詫びして訂正します。 ●7月号の特集は「稼ぐ・働くⅡ/アンペイド・ワークをめぐって」です。（編集部）

くらしと教育をつなぐWe 63号 (V o 1.7 N o 3) 1998年6月1日発行
 〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3-703 TEL FAX 0 3 (3 4 2 4) 3 6 0 3
 E-mail femix@mail2.alpha-net.or.jp 郵便振替 00130-7-754314 (有) フェミックス
 定価630円 (税込み) 年間購読料6800円 (送料共) 富士銀行 池尻大橋支店 普1501277
 発行 フェミックス 編集 稲邑恭子 中村泰子 吉田静恵 印刷 (有) イー・エム・ピー

いつの間にか元気になれる場所

フェミックスの 3つの部屋



●
**あなたの悩みを
共に考え、
自分らしく生きる
ことを
応援します**

- ◇カウンセリング
1時間6000円(予約制)
- ◇自己表現/自己主張トレーニング
- ◇カウンセリング講座、
ワークショップ、
アロマセラピー
- ◇公民館、女性セン
ター、自主グルー
プの講師もでき
ます。

●
**あなたの
表現活動を
サポートします**

- ◇単行本、会報、リーフレ
ット、ポスター、チラシ等
の企画、編集、デザイン、
校正、出版を引き受けます。
- ◇ヒアリング調査を請け
負います。
- ◇講演会、シンポジウ
ムの企画、コーデ
ィネットができます。

●
**あなたの視野を
広がります**

◇くらしと教育をつなぐWe

A5判/64ページ 1冊630円
年10回発行 年間購読6800円

□

特集：フェミニズム/性/教育/福祉
高齢化社会/働く/家族/環境/民族など

□ 共修の家庭科に役立つページ/実践報告/男の家庭科/エッセー
連載：水田宗子/木村栄/武田秀夫/蔦森樹/加藤昭仁他

Femix
フェミックス

〒154-0001 世田谷区池尻3-2-3-703
郵便振替 00130-7-754314(有)フェミックス
富士銀行 池尻大橋支店1501277

◆お問い合わせは TEL/FAX 03-3424-3603

連載

- おんなが歳をとるとのこと 木村栄
- シネマの魔 武田秀夫
- いきいきごんぼ 桑田良彦
- 変な子じゃないよね 滝野澤直子
- 染と織の歳時記 吉村美加
- 薦森樹の巡業日記
- 本をめぐる超！気まぐれなりれーえっせい
- 自己表現トレーニング 河村ふみ
- 居場所考 水田宗子

女と男の家庭科新時代

- 私の家庭科ラフスケッチ
- 家庭科—風がかわる匂いがかわる
- 楽市楽座 加藤昭仁
- かる〜い家庭科相談室
- オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎

くらしと教育をつなぐWe

1998年6月1日発行 第7巻第3号（通巻63号）

定価630円（本体600円）年間購読料6800円（送料共）

郵便振替 00130-7-754314フェミックス